

東宮遺跡

東宮土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1999

宮崎市教育委員会



東播系須恵器 片口鉢 (19)



和 鏡 (139)

序

宮崎市は平成10年4月1日より、中核市へ移行しました。また、同時に第三次宮崎市総合計画もスタートし、「躍動する太陽都市みやざき」の実現に向け、大きな一步を踏み出しました。

今後、宮崎市はより一層、魅力のある住みよい街づくりを目指し、益々発展してゆくものと思われますが、そのなかで私たちの身近に遺されている文化財はどのような役割を担っているのでしょうか。

新しいものをつくりだすこと、もちろん大事ですが、遺されてきたものを次の世代へ、伝えていくことも、また、大切なことです。高度経済成長期以後、産業構造の変化により、私たちをとりまく生活様式、環境は大きく様変わりしました。この技術革新は私たちの生活に急激な変化をもたらし、その結果、便利な暮らし、豊かさを手に入れることができました。その一方で核家族化により、これまで親から子へ、子から孫へと伝えられてきたものの断絶や古いものを軽視し、新しいものを重視するといった姿勢等、長い年月に渡って、守られ、伝えられてきた文化財にとっては、決して、いい環境ではなくなってきています。

「過去は未来への鍵」という言葉があります。文化財を大切にするということは、過去を考えることであると同時に、未来をしっかりと捉えることでもあるのです。文化財の保護、民俗芸能の伝承・保存、埋蔵文化財の発掘調査を通じて、過去の情報を発信することで、今後の私たちの未来への発展に少しでも役に立てばと思います。

本書は平成10年度に発掘調査を行いました東宮遺跡の埋蔵文化財調査報告書です。今回の調査では、弥生時代後期から近世にいたる溝状遺構、土坑等が検出され、それに伴い弥生土器、陶器、磁器等、様々なものが出土し、当地における旧地形や昔の人々の生活の一端を明らかにすことができました。

本書が学術研究はもとより皆様の埋蔵文化財、郷土の文化財への理解と認識を深める一助となり、また、社会教育の面にも広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、色々と御配慮、御協力を頂きました関係機関の方々、ならびに、発掘調査に従事された作業員の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

宮崎市教育委員会
教育長 内藤 泰夫

例 言

1. 本書は東宮土地区画整理事業にかかる東宮遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成10年4月28日から8月12日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び、調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課課長 野間 重孝

文化財係長 永井 淳生

調査事務 主事 竹野 隆司

調査員 技師 烏枝 誠

技師補 宇田川美和

補助員 属託 椎山美子

属託 松永 光雄

属託 小川 正子

属託 久富なをみ

5. 本書の執筆は烏枝が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は烏枝・宇田川・椎・松永・小川が分担して行った。
7. 現場における写真撮影は烏枝・宇田川が、遺物写真撮影は烏枝が行った。
8. 本書の編集は烏枝・久富が行った。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章 A区の調査	5
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構と遺物	5
第3節 包含層及び試掘調査の遺物	22
第Ⅲ章 B区の調査	23
第1節 調査の概要	23
第2節 遺構と遺物	23
第Ⅳ章 C区の調査	28
第1節 調査の概要	28
第2節 遺構と遺物	28
第3節 試掘調査の遺物	28
第Ⅴ章 D区の調査	30
第1節 調査の概要	30
第2節 遺構と遺物	30
第VI章まとめ	39

挿図目次

第1図 東宮遺跡周辺図 (1/25,000)	2
第2図 東宮遺跡調査区図 (1/1,000)	4
第3図 A区全体図 (1/120)	6
第4図 1~3号配石遺構実測図 (1/30)	7
第5図 1・3号配石遺構、1・2号土坑出土遺物 (1/3)	9
第6図 1~3号土坑実測図 (1/40)	10

第7図	1~8号溝状遺構出土遺物 (1/3)	12
第8図	10号溝状遺構出土遺物 1 (1/4)	15
第9図	10号溝状遺構出土遺物 2 (1/4)	16
第10図	10号溝状遺構出土遺物 3 (1/4)	17
第11図	10号溝状遺構出土遺物 4 (1/4)	19
第12図	10号溝状遺構出土遺物 5 (1/3)	20
第13図	10号溝状遺構出土遺物 6 (1/3)	21
第14図	包含層・試掘調査出土遺物 (1/3)	21
第15図	B区全体図 (1/100)	24
第16図	5・6号土坑実測図 (1/40)	24
第17図	4号土坑実測図 (1/30)	25
第18図	自然流路実測図 (1/50)	25
第19図	B区出土遺物 (1/3)	27
第20図	7号土坑実測図 (1/40)	28
第21図	C区出土遺物 (1/2)	28
第22図	C区全体図 (1/100)	29
第23図	D区全体図 (1/100)	29
第24図	8~19号土坑実測図 (1/40)	31
第25図	D区出土遺物 (1/3)	33

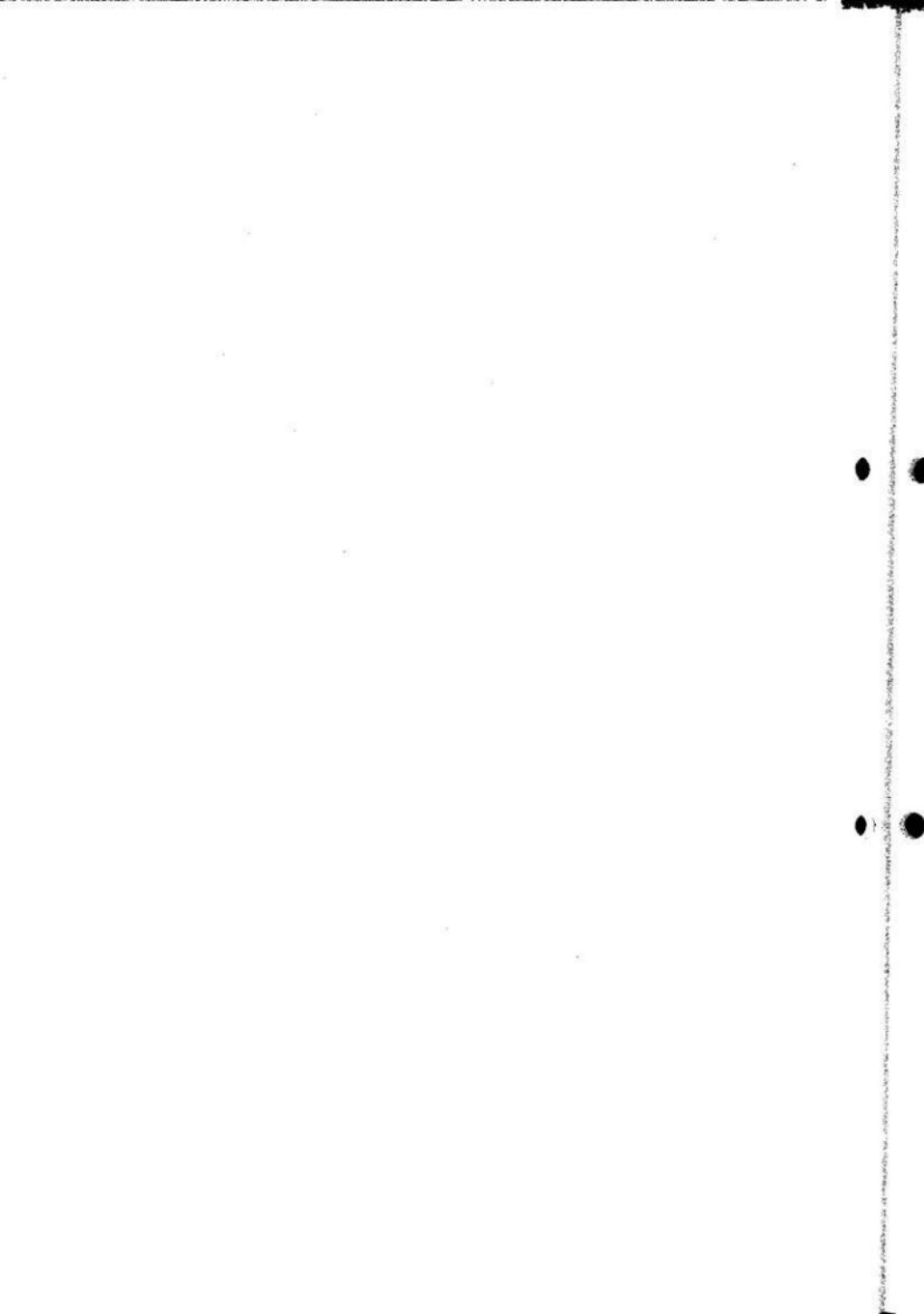
表 目 次

表 1	陶器・磁器観察表	34
表 2	弥生土器・土師器・須恵器観察表	35

図 版 目 次

図版 1	1号配石遺構 (北から)	41
図版 2	1号配石遺構五輪塔出土状況1	41
図版 3	1号配石遺構五輪塔出土状況2	41
図版 4	2号配石遺構 (北から)	42
図版 5	3号配石遺構 (北から)	42
図版 6	1号土坑 (南から)	42
図版 7	2号溝状遺構須恵器出土状況	42

図版 8	1・3号溝状遺構（北東から）	43
図版 9	4～7号溝状遺構（北から）	43
図版10	5号溝状遺構（南から）	43
図版11	8・9号溝状遺構（北東から）	43
図版12	10号溝状遺構遺物出土状況（南西から）	44
図版13	10号溝状遺構遺物出土状況1	44
図版14	10号溝状遺構遺物出土状況2	44
図版15	10号溝状遺構（南から）	44
図版16	B区東側遺構検出状況（東から）	45
図版17	4・5号土坑、11号溝状遺構（北から）	45
図版18	自然流路樹木出土状況	45
図版19	自然流路（北から）	45
図版20	C区遺構検出状況（西から）	46
図版21	D区遺構検出状況1（東から）	46
図版22	15～17号土坑（南東から）	46
図版23	D区遺構検出状況2（北から）	46
図版24	出土遺物1	47
図版25	出土遺物2	48
図版26	出土遺物3	49
図版27	出土遺物4	50



第Ⅰ章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

東宮遺跡の発掘調査は東宮土地区画整理組合による宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理事業に伴い行われた。この事業にかかり、宮崎市教育委員会は1次調査として、平成7年度に平田遺跡の調査を行っている。その事前協議のなかで、平成7年度調査区の本調査と、数年後に予定されている東側からの取り付け道路部分についての試掘調査の必要性を組合に説明した。

その後、数回の協議を重ね、東宮土地区画整理組合より、平成9年11月17日付けで、発掘届けが提出された。これを受けて、平成9年12月4日に試掘調査を実施した。トレンチ8本による試掘調査の結果、青銅鏡、底部糸切りの土師器壺、小皿、磁器碗、陶器皿が出土し、溝状遺構が検出され、遺跡の所在が確認された。

協議の結果、試掘調査で遺構、遺物の出土した地点の本調査と、試掘調査が行えなかった地点の確認調査を平成10年度当初から行うことで合意した。

発掘調査は平成10年4月28日から8月12日にかけて行われた。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

東宮遺跡は宮崎市大字郡司分字東宮に所在する。郡司分ならびに、北方に位置する本郷北方、本郷南方を含めた一帯は、建久8年（1197）に作成の「日向国図田帳」にみえる八条女院領国富庄の一円庄「国富本郷」の地にあたる。また、建武3年（1336）7月7日の日下部盛連証状（郡司文書）にみえる「那珂郡郡司名」は国富庄内に設定された郡司名とされ、この地はその遺称地とされる。

東宮遺跡は、海岸線から西へ1.9km、清武川左岸から北へ1.6kmの地点に位置し、西方より伸びる丘陵の東端裾部、南北方向に帶状に伸びる微高地（砂丘）の南端付近に立地している。遺跡の立地している微高地は標高5～6m程度で、遺跡の西側は谷により開析された丘陵地帯が、東側～南側にかけては水田地帯が拡がっている。

東宮遺跡周辺の遺跡としては西方250mの開析谷に平田遺跡A、B区が所在する。平田遺跡の調査は東宮土地区画整理事業に伴い、平成7年度に実施された。調査の結果、時期不明の溝状遺構が2条検出され、調査区からは弥生時代終末から中世にかけての遺物が出土している。

A、B区の北方170mには平田遺跡C区が所在する。調査の結果、地表から約2m下がったところで、10～11世紀代の土師器や木杭、自然木が出土しており、埋没した自然流路もしくは沼地と推定される。

東宮遺跡の北方750mの微高地上には平成7年度に調査された榎田遺跡が所在している。榎田遺跡からは溝状遺構1条が検出され、平安時代の土師器、須恵器が出土している。また、榎田



1. 東宮遺跡 2. 平田遺跡 3. 経筒出土地点 4. 西田第2遺跡 5. 橋田遺跡
6. 西田第1遺跡 7. 松ヶ迫黒跡 8. 市位遺跡 9. 赤江遺跡 10. 木花古墳群
11. 熊野第2遺跡 12. 西ノ原遺跡 13. 西ノ原第2遺跡 14. 宮崎学園都市遺跡群 15. 車坂・山下遺跡群

第1図 東宮遺跡周辺図 (1/25,000)

遺跡の南北には弥生～古墳時代の遺物が散布する西田第1、第2遺跡が所在している。

西南650mの標高51.3mの三角点のある山頂からは、戦前に銅鑄製の積上式経筒が発見されている。経筒は総高41.4cmを測り、蓋は相輪のついた傘蓋で、筒身は4個の筒を積み上げ1本の円筒としており、底は2段よりなる台底である。経筒はその形態より、12世紀中頃の所産であると思われる。

北西約900mの丘陵斜面には、松ヶ迫窯跡が所在した。窯跡は昭和41年に2基調査され、8世紀前半に比定される須恵器の甕、壺蓋、高台付椀が出土している。

北西1.6kmの丘陵上には市位遺跡が所在する。市位遺跡では丘陵斜面、テラス面より、弥生時代中期、古墳時代後期、平安時代の竪穴住居が8軒、縄文時代早期の集石が8基検出されている。

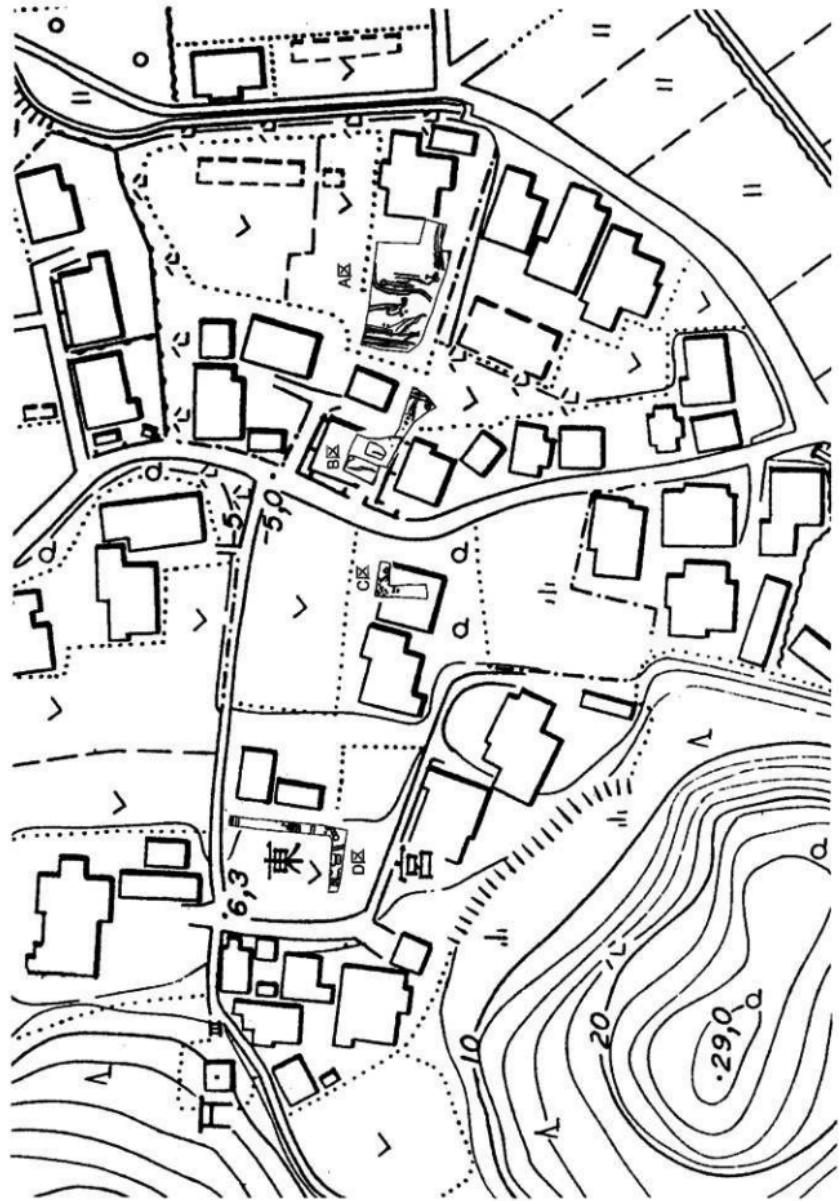
北東3kmの宮崎空港敷地内には赤江遺跡が所在する。赤江遺跡では遺構が検出されておらず、詳細は不明であるが、弥生時代後期～終末期の甕、壺、鉢等が表採されており、砂丘上の立地や出土土器の時期に、東宮遺跡との共通点が認められる。

対岸の清武川右岸では、東宮遺跡の南西1.6kmの微高地上に木花古墳群が所在する。木花古墳群は現在、前方後円墳2基、円墳1基の3基が確認され、前方後円墳の2号墳からは川西編年V期に併行する円筒埴輪片が表採されている。

更に南方の標高10～40mの洪積台地上には宮崎学園都市遺跡群、車坂・山下遺跡群、西ノ原遺跡、西ノ原第2遺跡、熊野第2遺跡等、旧石器時代から近世にわたる数多くの遺跡が所在している。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| 『宮崎県の地名』日本歴史地名体系第46巻 | 1997 平凡社 |
| 『平田遺跡』宮崎市埋蔵文化財発掘調査の報告書 | 1996 宮崎市教育委員会 |
| 『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書II』(リゾート地区を中心として) | 1990 宮崎市教育委員会 |
| 茂山 譲「宮崎県の経塚地名録」「研究紀要」第3輯 | 1972 宮崎県総合博物館 |
| 『市位遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第10集 | 1998 宮崎県埋蔵文化財センター |
| 『宮崎県史』通史編 古代2 | 1998 宮崎県 |
| 『宮崎県史』資料編 考古1 | 1989 宮崎県 |



第2図 東宮遺跡調査区図 (1/1,000)

第 II 章 A 区の調査

第 1 節 調査の概要

遺跡内で最も東端にあたる調査区で、基盤は東側部分が灰色砂層、西側部分が黄褐色粘土層となる。調査区東側は家屋が建っていた関係上、大きく攪乱されており、遺構の遺存状況は極めて悪かった。

調査区内からは試掘調査時に青銅鏡、糸切底の土師器の坏、小皿が出土しており、祭祀遺構、土壙墓等の検出が予想されたが、これらの遺物に直接関係するような遺構は検出されなかつた。

調査面積は317m²で、配石遺構3基、土坑3基、溝状遺構10条が検出された。配石遺構に伴い五輪塔、陶器等が、土坑から陶磁器類が、溝状遺構から弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、土錐などが出土している。

第 2 節 遺構と遺物

1号配石遺構 (第4図)

調査区東側、1号溝状遺構上に主軸方向を同じくして重複する。最大長4.76m、最大幅0.68mを測り、帶状に南北に延びる。配石の大半は円礫より構成されるが、1~4のような五輪塔の一部や角礫、軽石も含まれている。配石遺構は溝状の掘り込みをもち、石は約40cmの厚みをもって、配されている。

配石内の礫間から陶器、土師器小皿、須恵器、土師器が出土している。

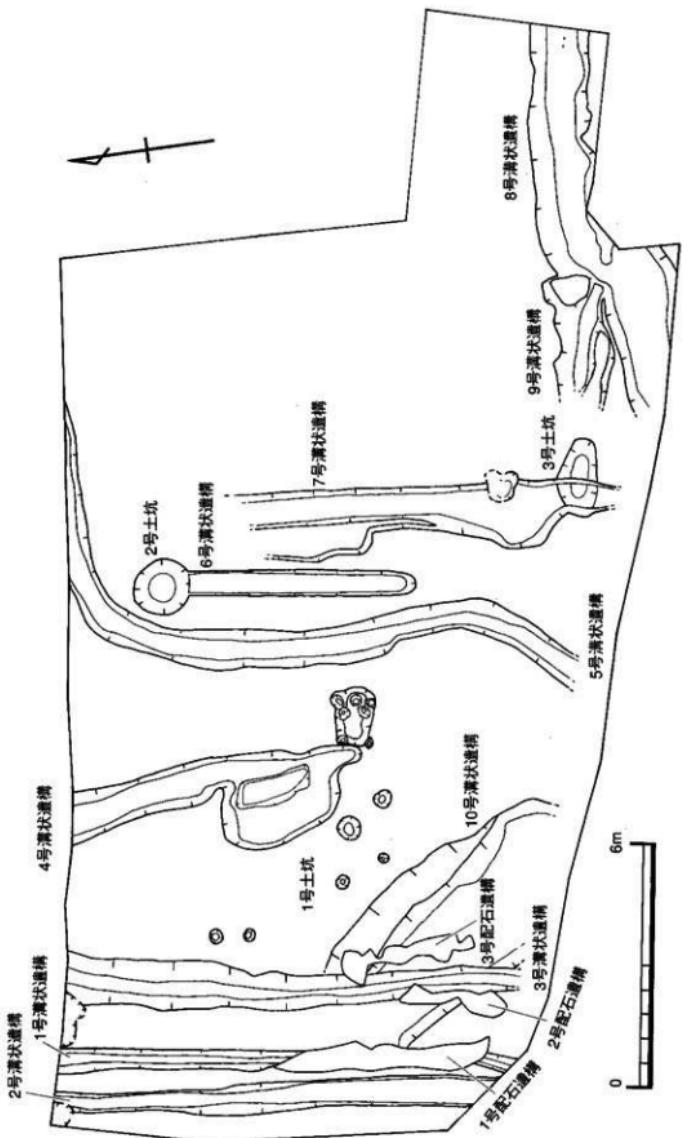
〔出土遺物〕 (第5図)

1~3は五輪塔の空風輪である。1は全長19.15cm、空輪は尖頭形を呈し、最大径を中位より下方にもち、長さ10.95cm、径11.6cmを測る。くびれ部分は上端幅0.55cm、深さ0.7cmのV字形の溝を設ける。風輪は長さ4.1cm、径11.3cmを測り、風輪上半部に最大径をもつ。差し込み部は長さ3.5cm、径5.7cmを測る。空輪と風輪の長さの比は2.67:1である。

2は全長18.5cm、空輪は尖頭形を呈し、空輪下辺部が最大径となる。長さ10.7cm、径12.7cmを測る。くびれ部分は上端幅1.1cm、下端幅0.5cm、深さ2.1cmの溝を設ける。風輪は長さ3.1cm、径12.5cmを測る。偏平で、風輪中位が最大径となる。差し込み部は長さ3.6cm、径5.3cmを測る。空輪と風輪の長さの比は3.41:1である。

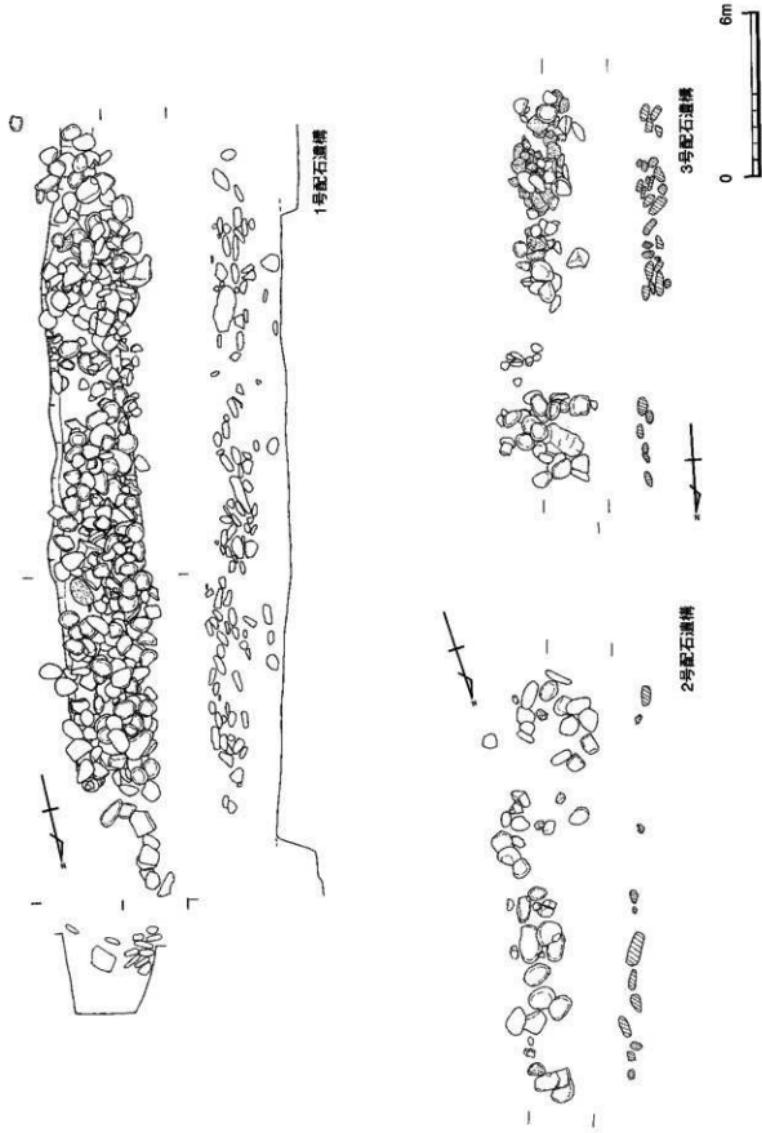
3は全長29.7cm、空輪は円頭形を呈し、下方寄りに最大径をもつ。長さ13.3cm、径13.8cmを測る。くびれ部分は上端幅1.1cm、下端幅0.7cm、深さ0.6cmの溝を設ける。風輪は長さ7cm、径は一部欠損している為、不明である。風輪上辺部が最大径になるものと思われる。差し込み部は長さ8.3cm、径8.2cmを測る。空輪と風輪の長さの比は1.9:1である。

4は五輪塔の火輪である。大きく破損して、風化も著しいが、上辺長13.2cmを測り、中央部



第3図 A区全体図 (1/120)

第4図 1~3号配石遺構実測図 (1/30)



に径9cmの円形の枘穴を穿っている。石材はいずれも凝灰岩である。

5は常滑燒窯の胸部片である。肩部に帶状に押印文を施し、肩部と胸部との境は強く屈曲する。6、7は糸切り底の土師器である。6は壺で、体部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。7は小皿で、口縁部は直線的に立ち上がる。8は須恵器の鉢、9は弥生土器の甕である。頸部に断面三角形の高い突帯を巡らす。

2号配石遺構 (第4図)

1号配石遺構の東側に位置し、最大長2.65m、最大幅0.55mを測る。配石に用いられている石の大半は円礫により構成され、一部に軽石、角礫も見られる。配石は帶状に南北に延び、石の集積状況は粗で、重複して配されていない。

配石内の礫間から、播鉢、須恵器、弥生土器の小片が出土している。

3号配石遺構 (第4図)

2号配石遺構の東側に位置し、最大長2.45m、最大幅0.62mを測る。配石の大半は円礫、軽石により構成され、他の配石に比べ、軽石の占める割合が高い。配石は帶状に南北に延びるが、途中で途切れ、北側と南側に分断される。南側は円礫より軽石を多く使用しており、石は約20cmの厚みをもって、配されている。

配石内の礫間から、東播系須恵器鉢の口縁部(10)が出土している。

1号土坑 (第6図)

長軸3.1m、短軸1.8m以上、深さ52cmを測る。不整方形のプランを呈し、東側は4号溝状遺構と切り合う。埋土は黒褐色で、埋土中に多量の円礫を含んでいた。遺物は陶器の甕、播鉢、碗や磁器の香炉、瓦等が出土している。

[出土遺物] (第5図)

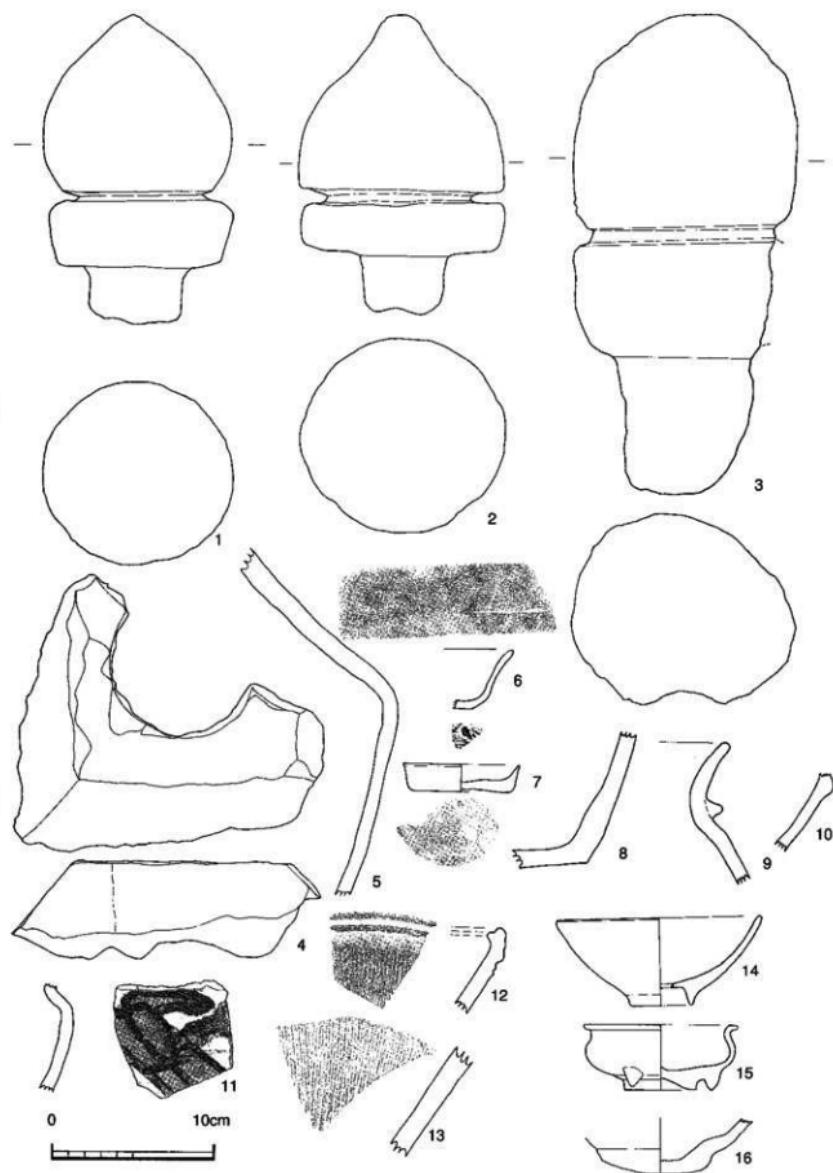
11は陶器の甕である。白化粧土をベースに褐色釉、黄灰色釉、緑灰色釉で模様を描く。12、13は播鉢である。12は口縁部で、端部に1条、外面に2条の沈線を巡らす。14は陶器の碗で、黄灰色の釉を施しており、貫入がはいり、疊付は釉はぎを施している。15は磁器の香炉で、青磁釉を施す。内面及び高台内面は露胎で、外面に3本の支脚を有する。

2号土坑 (第6図)

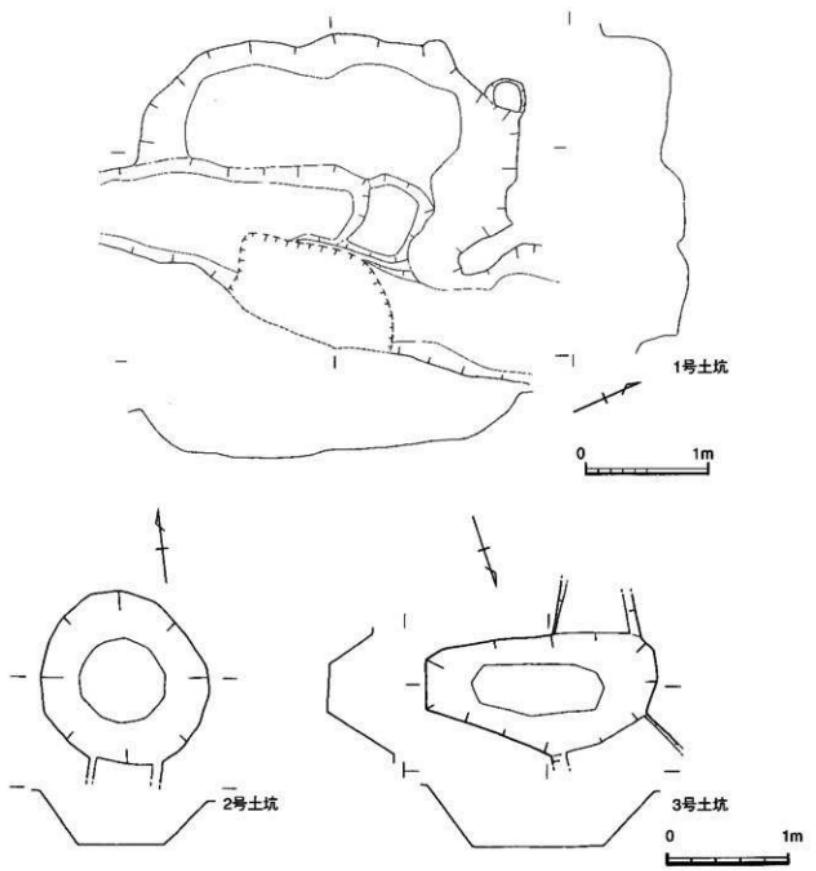
調査区中央やや北に位置する円形の土坑で、南側は6号溝状遺構と切り合う。規模は径1.4m、深さ45cmを測る。遺物は流れ込みとみられる土師器甕の底部(16)が出土している。

3号土坑 (第6図)

調査区南東側に位置する平面楕円形の土坑で、主軸は東西方向である。規模は長軸1.9m、短軸1.0m、深さ55cmを測り、埋土中から、土師器片が少量出土している。



第5図 1・3号配石遺構、1・2号土坑出土遺物 (1/3)



第6図 1～3号土坑実測図 (1/40)

1号溝状遺構 (第3図)

調査区西側で検出され、西側に約50cm離れて、2号溝状遺構が、東側に約1m離れて、3号溝状遺構が平行して南北方向に延びる。南側では溝に沿って上部に、1号配石遺構が構築されている。幅70cm、深さ40cmを測る。溝断面は逆台形を呈し、溝底は北から南への下り傾斜となる。

遺物は埋土中から磁器、土錘等が出土している。

〔出土遺物〕 (第7図)

17は肥前産の磁器染付碗で、外面には青磁釉がかかっており、口縁部内面に四方櫛文、見込には五弁花文が描かれている。18は土錘で、長さ5.2cm、重量9.3gを測る。

2号溝状遺構 (第3図)

調査区西端に位置する。南北方向に延び、幅50~80cm、深さ10cmを測る。溝断面は逆台形を呈し、溝底は北から南への緩やかな下り傾斜となる。

遺物は完形の須恵器の鉢(19)が溝底面に据え置かれたような状態で出土した。他に遺物は土師器小皿、壺、弥生土器の甕が出土している。

(出土遺物) (第7図)

19~21は須恵器の鉢である。19は東播系須恵器の片口鉢である。口径28.5cm、底径10.7cm、器高11.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は上、下方に拡張する。器面調整は底部に糸切り痕が残り、体部外面は回転ナデ調整、内面は指ナデ調整である。20は口縁部である。口縁は肥厚する。21は底部である。

22は弥生土器の甕の口縁部である。口縁部下に断面台形の突帯を1条廻らす。

3号溝状遺構 (第3図)

1号溝状遺構の東側に位置する。南北方向に延び、幅60~120cm、深さ65cmを測る。溝断面は逆台形を呈し、溝底は北から南への下り傾斜となる。南側で10号溝状遺構を切り、2・3号配石遺構に切られる。

遺物は弥生土器の甕、壺、須恵器の鉢、土師器の壺、小皿、陶器、磁器、軽石が出土している。

(出土遺物) (第7図)

23、24は掘鉢である。23は口縁部が垂直に立ち上がり、先端はやや内傾する。24は糸切りの底部である。25は土師器の壺、26、27は小皿である。26、27の底部は糸切りである。28は須恵器の鉢の底部である。29は土鍤で、長さ5.2cm、重量11.75gを測る。

30~32は弥生土器である。30は甕の口縁部で、短く外反し、端部は面を作る。31は壺の底部である。32は壺の肩部で、断面三角形の突帯が5条廻る。

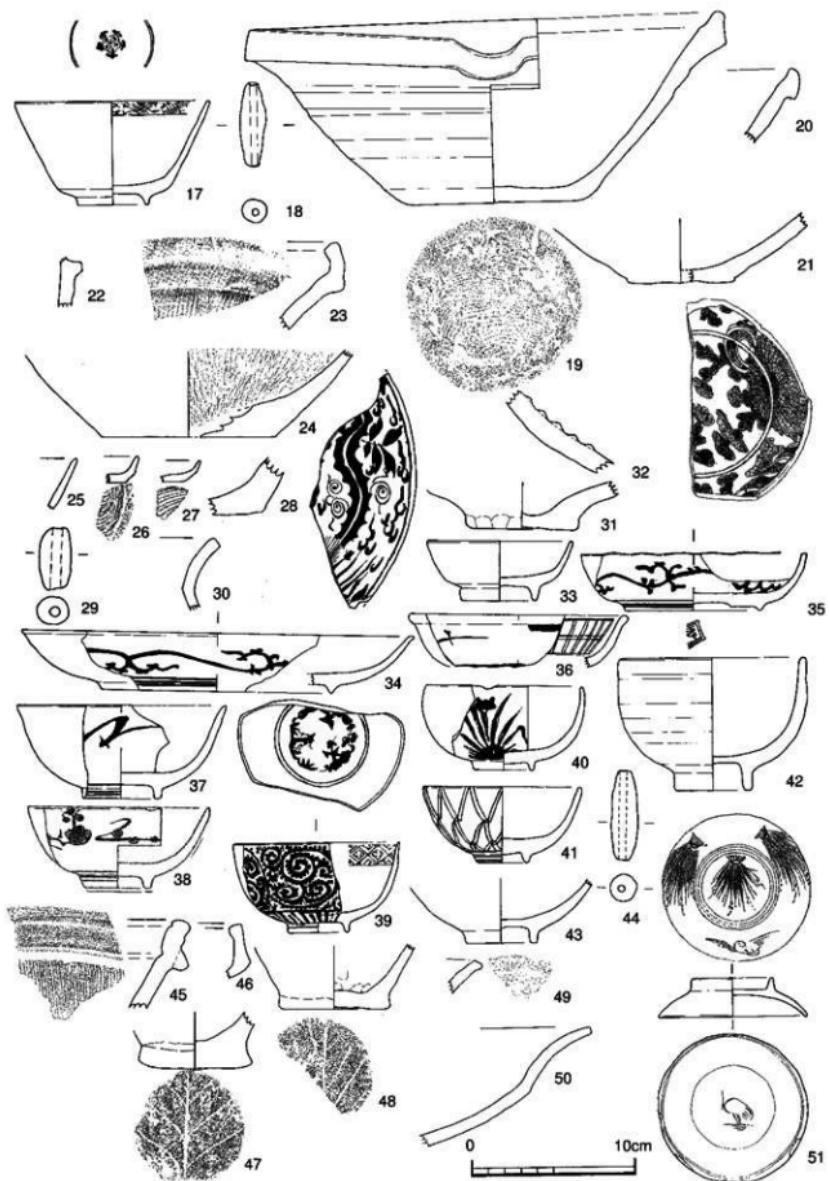
4号溝状遺構 (第3図)

3号溝状遺構の東側に位置する。ほぼ南北に延び、南側にいくにつれ、しだいに幅を減じ、1号土坑と切り合い、その南側で収束する。幅50~120cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。

遺物は陶器の碗、磁器、須恵器が出土している。

(出土遺物) (第7図)

33は陶器の碗で、灰黄白色の釉がかかっており、貫入がみられる。胴最下部から高台外面、内面にかけては露胎になっている。



第7図 1～8号溝状遺構出土遺物 (1/3)

5号溝状遺構 (第3図)

4号溝状遺構の東側に位置する。調査区中央をS字状に蛇行しながら、南北に縦断する。幅70~100cm、深さ35cmを測る。断面はU字形を呈し、溝底は南から北への緩やかな下り傾斜となる。調査区ほぼ中央付近の溝壁上巾から、長径30cm程の大石が検出され、その付近から、ややまとまりをもって磁器類が出土した。

遺物は磁器の碗、皿、陶器の碗、壺、土錐が出土している。

〔出土遺物〕 (第7図)

34~36は肥前産染付磁器皿である。34は外面に唐草文、内面も唐草文を描いている。豊付は釉はぎである。35は口縁部が輪花状を呈し、外面に唐草文、内面は菊唐草文を描いている。高台は蛇の目凹形で、高台内面底には銘が見られる。36は玉縁口縁で、内外面は白土を刷毛により塗布して、透明の釉をかけている。外面には草文、内面に二重格子口文を描いている。

37~41は肥前産染付磁器碗である。37は外面に草文を描く。見込は蛇の目釉はぎを施し、砂目が付着する。豊付は釉はぎで、砂目が付着している。38は外面に梅樹文を描いている。見込は蛇の目釉はぎを施しており、砂目が付着する。豊付は釉はぎで、砂目が付着している。39は外面に蛸唐草文、花弁を描き、内面は四方禪文、見込には松竹梅文を描いている。40は外面に菖蒲文を描き、豊付は釉はぎで、砂目が付着している。41は外面に二重縞口文を描く。豊付は釉はぎを施している。

42、43は陶器の碗である。42は浅黄灰色の釉がかかり、貫入がみられる。豊付は釉はぎを施し、砂目が付着している。43も浅黄灰色の釉がかかり、豊付は釉はぎ。44は土錐で、長さ5.5cm、重量15.1gを測る。

6号溝状遺構 (第3図)

5号溝状遺構の東側に位置する。南北に延び、北側で2号土坑を切り、調査区中央付近で、収束する。幅60cm、深さ20cmを測る。断面は浅い逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦であるが、僅かに北側へ下る。遺物は出土していない。

7号溝状遺構 (第3図)

6号溝状遺構の東側に位置し、南北に延びる。北側は攢乱の為、残存していない。中央部では西側に張出しを設け、テラス状になっており、南側は3号土坑と切り合っている。幅60~180cm、深さ45cmを測る。断面は浅い逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦であるが、僅かに北側へ下る。遺物は擂鉢(45)、焙烙(46)が出土している。

8号溝状遺構 (第3図)

調査区南東隅に位置し、東西方向に小さく蛇行しながら延びる。幅190cm、深さ80cmを測り、断面は逆台形を呈し、溝底は西から東への緩やかな下り傾斜となる。

溝が屈曲している箇所の埋土中位から、長径25~40cmの大石が2個出土した。遺物は土師器の甕、弥生土器、磁器が出土している。

[出土遺物] (第7図)

47、48は土師器の甕である。ともに平底で、木葉底である。49は弥生土器の壺の口縁部で、端部に波状文を施している。50は弥生土器の高杯で、口縁部は外反する。51は磁器の碗蓋で、外面には稻束と雀、内面には鶴を描いている。

9号溝状遺構 (第3図)

調査区南東に位置する。東西方向に延び、東端で8号溝状遺構を切る。南側に一段低いテラスをもつ。溝底はほぼ平坦であるが、僅かに東側へ下がる。幅110~130cm、深さ45cmを測り、埋土中から陶器、磁器が出土している。

10号溝状遺構 (第3図)

調査区西側を北西→南東方向に継続している。幅3.6m、深さ85cmを測る。1~3号配石遺構、1~3号溝状遺構に切られる。東側斜面上部の傾斜は比較的緩やかで、途中から、垂直に近い角度で落ち、底にいたる。断面は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。

溝の埋土は下層から、明黄褐色粘質土、暗黄褐色粘質土、暗褐色土、黒褐色土の順で堆積しており、明黄褐色、暗黄褐色粘質土層から、最大約45cmの厚さで、弥生土器が大量に出土した。地山は溝の東側は黄色砂質土層で、西側は黄色粘質土層である。

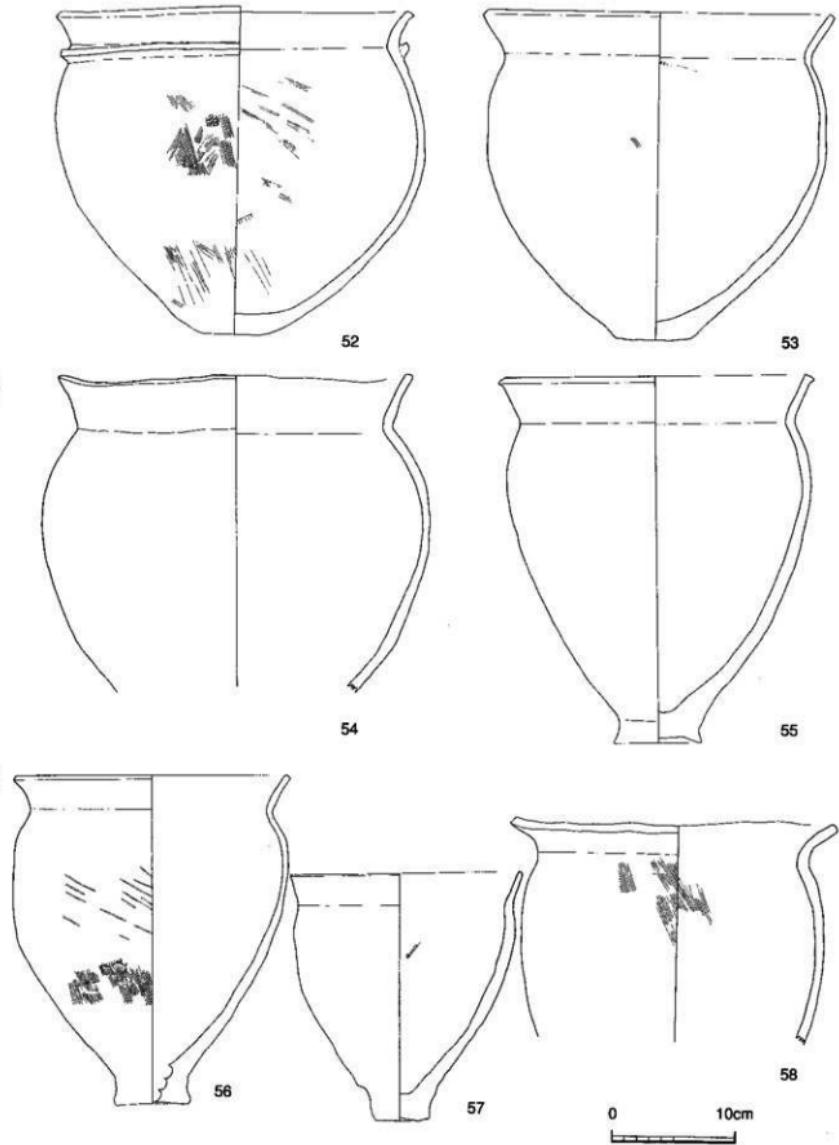
[出土遺物] (第8~13図)

52~78は甕である。52~54は胴上半部が大きく張り、最大径となるもので、52は口縁部は短く外反し、端部は面を作る。頸部に断面台形の突帯を付している。底部は平底を呈する。53、54は口縁部が、やや長く、立ち気味に外傾し、端部は面を作る。53の底部は平底を呈する。55、56は高く突出し、やや上げ底になる底部がつく。胴部は上半部が張り、口縁部はやや長く、立ち気味に外傾し、端部は面を作る。56は胴上半部外面にタタキ調整を施す。

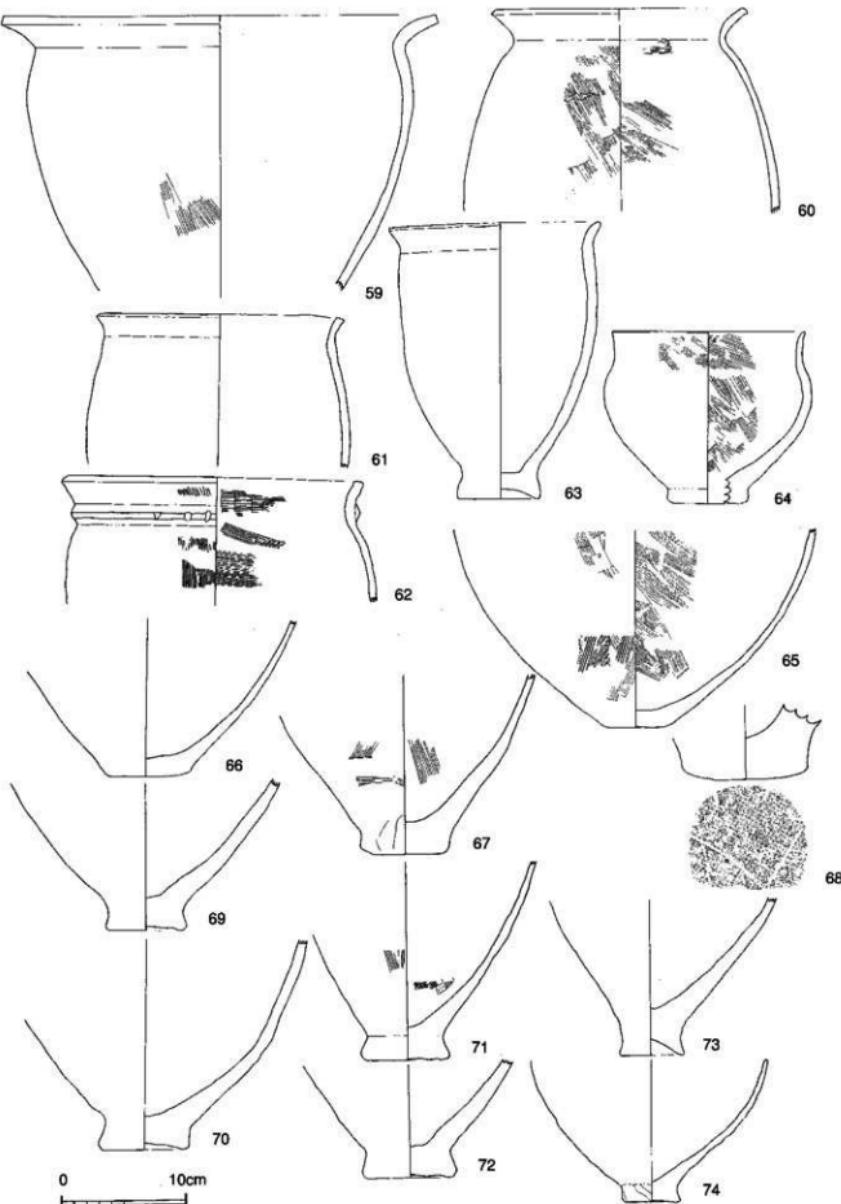
57は突出底で、僅かに上げ底を呈し、胴部は上半部が張り、口縁部は立ち気味に外傾する。端部は丸くおさめる。58~60は胴上半部が張り、口縁部は外反し、端部は面を作る。61、62は胴上半部に最大径をもち、口縁部は短く外反し、端部は面を作る。62は頸部に突帯を廻らす。63は突出する上げ底の底部を呈し、胴上半部がやや張り、口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。64は突出する平底の底部を呈し、胴上半部に最大径をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上方で、ごく僅かに外反する。

65~75は底部で、65、66は平底、67~73は高く突出する底部である。67、68は突出した平底のものである。69~72はやや上げ底気味で、下方に広がり、踏ん張る。73は高い上げ底である。74、75はやや突出する底部で、いずれも、僅かに上げ底である。

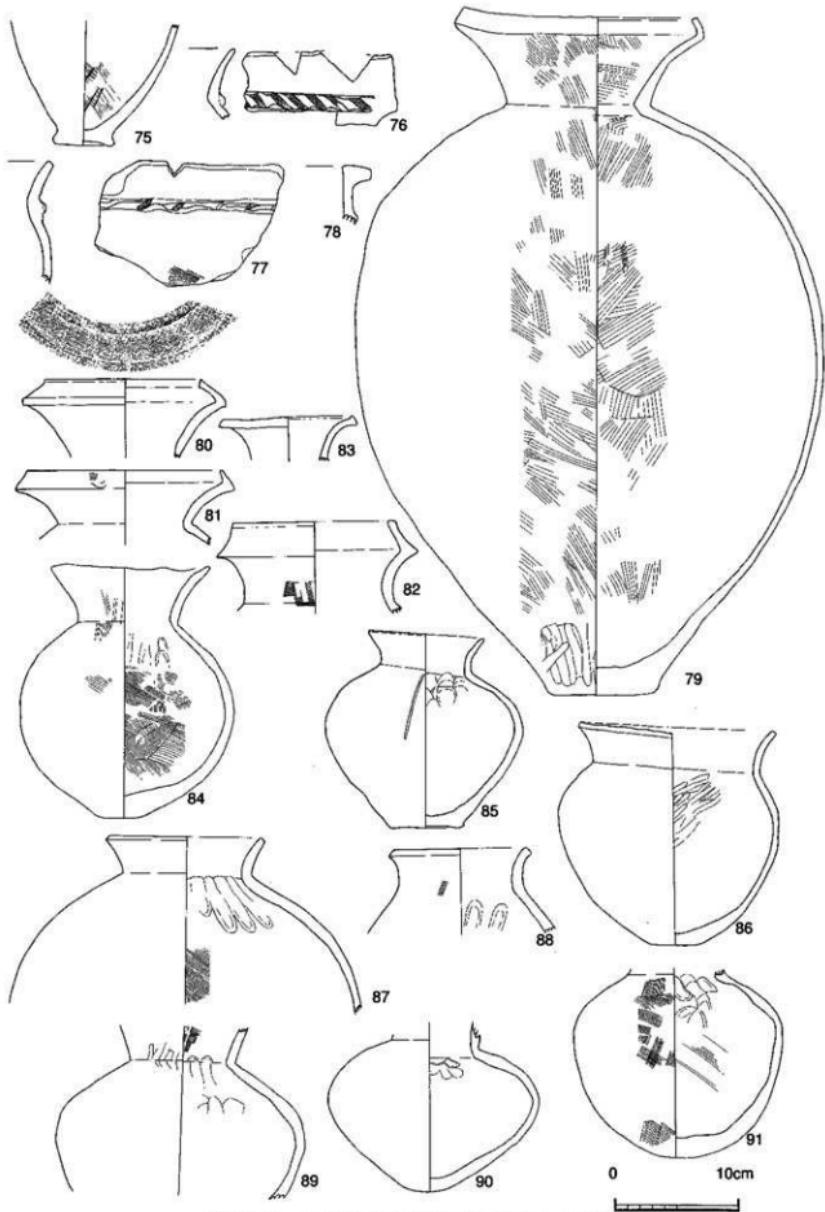
76、77は刻目突帯を付す甕の口縁部である。いずれも、刻目のなかに布目痕がみられる。口縁端部は76が丸くおさめ、77は面をもつ。78は逆L字口縁の甕で、口縁下に断面三角形の突帯を付している。



第8図 10号溝状遺構出土遺物1 (1/4)



第9図 10号溝状遺構出土遺物2 (1/4)



第10図 10号溝状遺構出土遺物3 (1/4)

79~99は壺である。79~82は二重口縁の壺で、80、81は口縁部外面に波状文を施す。79は大型の壺である。平底で、卵形の胴部を呈し、最大径は胴上半部にもつ。80は受部と口縁部の境に幅6mm程の面を作り、口縁端部はつまみ上げている。82は口縁部が長く内傾する。

83~89は単口縁の壺である。83は口縁端部をつまみ上げ、外側には面を作る。84、85は口縁端部を丸くおさめ、86~88は端部に面を作る。84は長く外反する口縁部に、胴中位が丸く張る胴部に小さな平底の底部をもつ。85は口縁部が上方に立ち上がり、外反し、胴部は上半部が張り、底部は僅かに上げ底である。86は口縁部は外反し、頸部は太い。胴上半部が張り、底部は平底である。87は大きく肩の張る胴部に短く外反する口縁部がつく。88は口縁部が上方に立ち上がり、短く緩やかに外反する。

90、91は頸部から底部である。ともに丸底で、90は肩が大きく張り、偏平な胴部をもつ。91は胴上半が張り、丸いプロポーションの胴部である。

92、93は胴部である。92は胴上半部が大きく張り、93は胴中位が丸く張っている。

94~97は底部である。94、95は突出する底部で、94は大きな平底、95は僅かに突出する平底である。96は平底、97は丸底である。

98、99は口縁部で、98は口縁端部に波状文を施している。99は鋤先口縁で、端部には縦方向の刻みを施している。

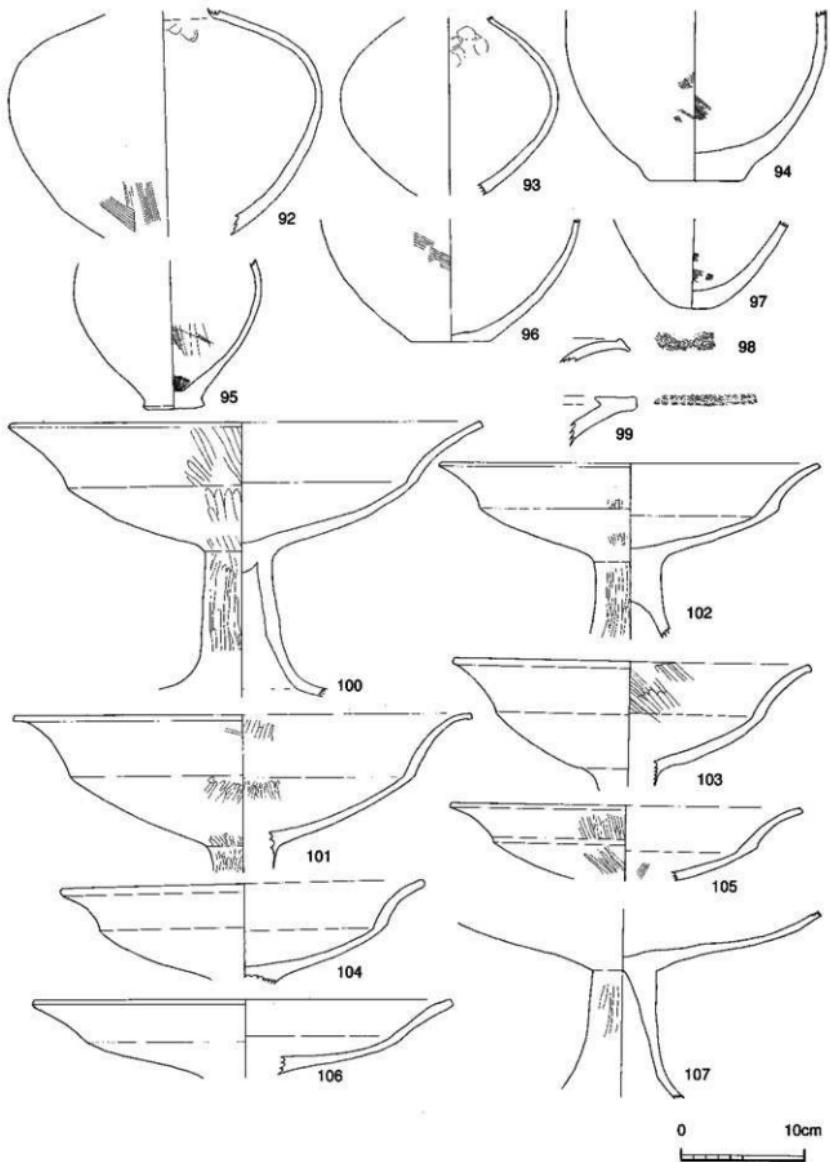
100~112は高坏である。100は大きな坏部をもつ高坏で、受部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、口縁部は外反し、端部は面を作る。脚部は脚柱部が下方に向かって、ごく僅かに開き、裾部は緩やかに屈曲して広がる。101~106は坏部である。形態的に100と大きくは変わらないが、101、102、104は口縁部の外反が他のものに比べ、やや強く、105、106は坏部が浅い。107~112は高坏の脚部である。108~110は円形の穿孔を施す。

113は器台である。豊前型の器台で、口縁部の1/3程をU字状に切り開いている。

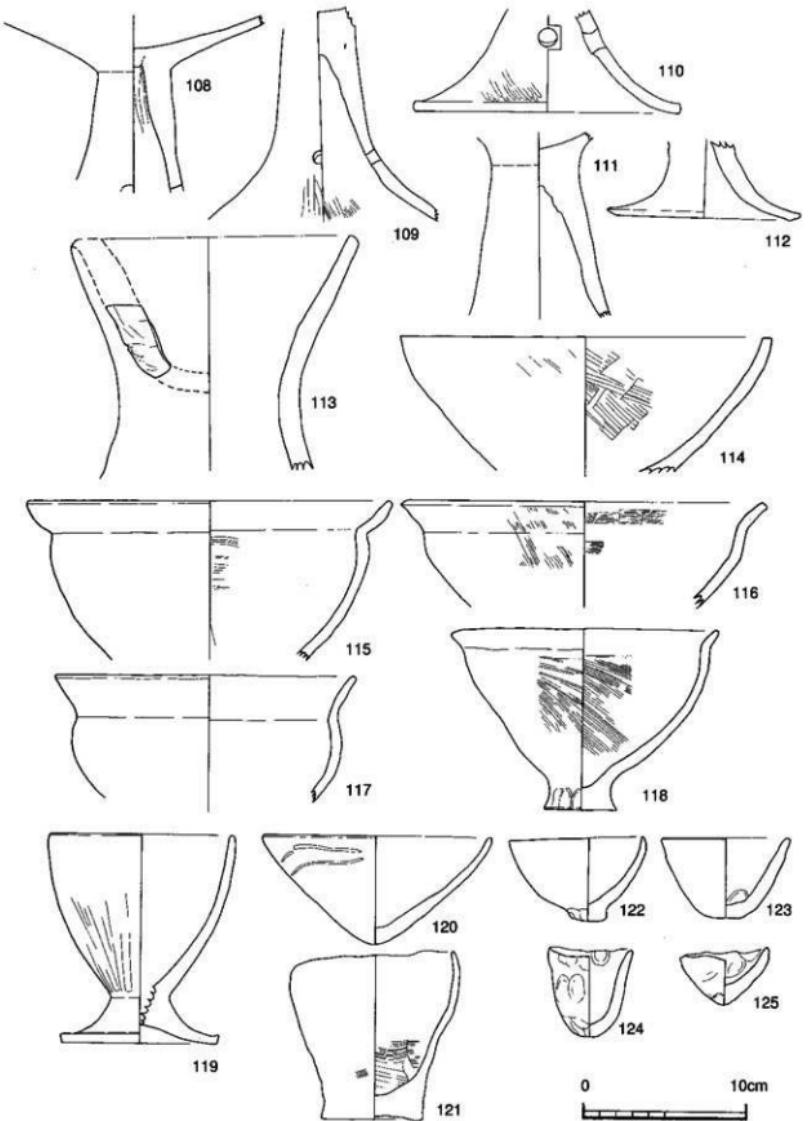
114~121は鉢である。114は体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は面を作っている。115、116は体部上位がやや張り、115は口縁部が内彎気味に伸び、端部は丸くおさめる。116は口縁部は外傾し、端部は面を作る。117は体部上位がやや張り、口縁部は外傾し、端部は丸くおさめている。118は突出するやや高い底部をもち、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。119は脚台をもち、体部は緩やかに内彎しながら、立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。120は底部は尖底で、体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに内彎する。外面に線刻を施している。121は厚い底部から体部は上方に立ち上がり、口縁部は僅かに内彎する。

122~125はミニチュア土器である。いずれも鉢形を呈する。122は底部はやや突出する平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。123は平底、124は平底に近い丸底、125は尖底を呈する。

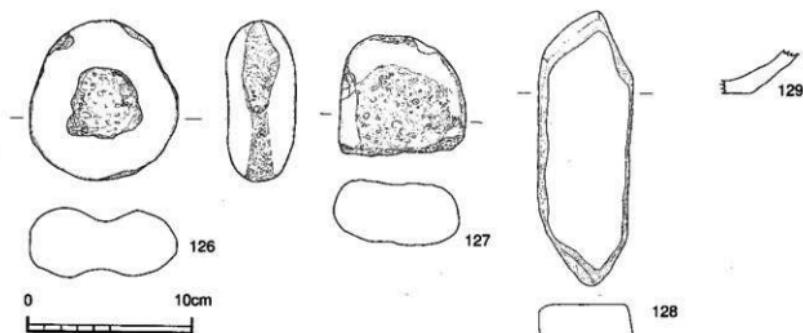
126、127は敲石である。126は表裏両面に敲打痕が見られ、大きく窪んでいる。また、側面にも敲打痕が見られる。最大長9.8cm、最大幅9.0cm、最大厚4.2cm、重量515gを測る。



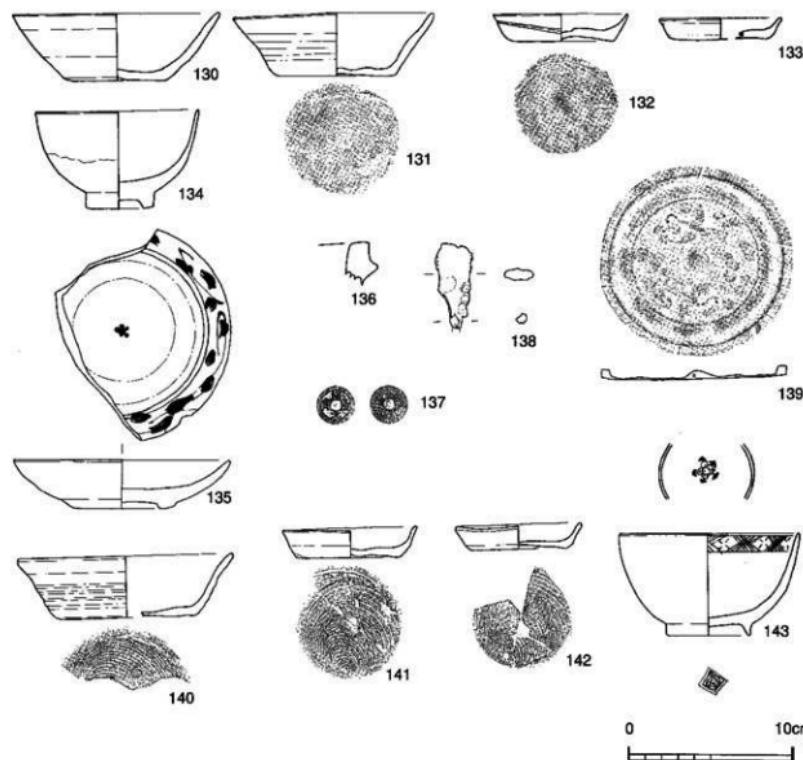
第11図 10号溝状遺構出土遺物4 (1/4)



第12図 10号溝状遺構出土遺物5 (1/3)



第13図 10号溝状遺構遺物6 (1/3)



第14図 包含層・試掘調査出土遺物 (1/3)

- 127も表裏両面に敲打痕が見られる。最大幅7.7cm、最大厚3.8cm、重量300gを測る。
- 128は砥石である。表裏両面ともに使用されている。最大長16.8cm、最大幅5.8cm、最大厚2.8cm、重量530gを測る。石材はいずれも砂岩である。
- 129は須恵器の鉢である。

第3節 包含層及び試掘調査の遺物 (第14図)

- 130～138は主に、調査区南西側に残っていた暗褐色土層から出土したものである。
- 130、131は土師器の壺である。130はヘラ切り底で、体部は内彎気味に立ち上がる。口径12.7cm、底径5.8cm、器高4.1cmを測る。131は糸切り底で、体部は直線的に立ち上がる。口径12.3cm、底径7.2cm、器高3.9cmを測る。
- 132、133は糸切り底の土師器の小皿である。132は外面に、調整の際にできた沈線状の溝が、らせん状に廻る。口径8.3cm、底径6.2cm、器高1.7cmを測る。
- 134は陶器の碗である。外面は青緑色の釉薬をかけており、内面に釉だれしている。貫入が見られ、体部下部から高台にかけては露胎である。
- 135は磁器で、くらわんかの皿である。内外面ともに灰白色の釉をかけている。内面に草花文、見込にはコンニャク印判による五弁花文を描く。見込は蛇の目釉はぎを施し、砂目が付着している。疊付は釉はぎで、砂目が付着している。
- 136は滑石製石鍋である。口縁部直下に断面三角形の鋸を削り出している。
- 137は紹聖元寶である。北宋銭で、鑄造年代は紹聖年中（1094～1097年）である。文字は楷書体で書かれており、直径2.35cm、重量2.27gを測る。
- 138は鉄鎌と思われる。残存長5.1cmを測る。
- 139～143は試掘調査時に出土した遺物である。試掘箇所は10号溝状遺構東側付近で、現地表から、僅か15cmの位置で出土した。
- 139は松鶴鏡である。鏡径11.43cm、厚さ約1.0mm、周縁幅5.9mm、周縁高5.5mm、鉢径1.7cm、鉢高3.5mm、重量170gを測る。鉢は亀形を呈し、周縁は幅広で、やや外傾気味に立ち上がる。鏡背面には一重の界圏を巡らし、内区には銀を中心に2羽の鶴が対象の位置で飛翔し、その周囲に松葉文を配している。外区には松葉文のみを配する。
- 鏡面及び、鏡背面に纖維が付着しており。布に包まれていたか、袋状のものに納められたと思われる。
- 140～142は糸切り底の土師器である。140は壺で、推定口径13.1cm、推定底径6.4cm、器高3.8cmを測る。141、142は小皿で、口径7.7～8.2cm、底径5.9～6.3cm、器高1.6～1.9cmを測る。
- 143は磁器で、肥前産の染付碗である。外面には青磁釉が施されており、口縁部内面に四方櫛文が、見込には五弁花文が描かれている。疊付は釉はぎ、高台内面底には渦福鉢が見られる。

第Ⅲ章 B区の調査

第1節 調査の概要

A区西側に位置し、北西側は調査以前には家屋が建っていた。遺構の検出は黄褐色粘土層で行った。調査の結果、調査区東側より近世以降の構築と推定される溝状遺構4条、土坑3基が検出され、陶器、磁器、瓦、土人形等が出土した。また、調査区西側では、近世遺構面の下層から自然流路が検出された。流路からは多量の樹木の幹、枝等が検出され、それらに混じって土師器、弥生土器が出土した。調査面積は118m²を測る。

第2節 遺構と遺物

11号溝状遺構 (第15図)

調査区東側に位置し、北東—南西方向に延びる。幅1.1~1.25m、深さ20~25cmを測り、断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。溝底から溝と主軸を同じくする4・5号土坑が検出された。遺物は陶器、磁器、瓦、土師器が出土している。

〔出土遺物〕 (第19図)

144は陶器の甕で口縁部は肥厚する。145は磁器染付皿である。口縁部は輪花状を呈し、外面に草花文、内面に牡丹文、見込に松竹梅文を描く。高台は蛇の目凹形である。

4号土坑 (第17図)

11号溝状遺構北側底面で検出され、北側は調査区外にかかる。平面形態は長方形を呈するものと思われ、長軸1.75m以上、短軸0.95m、深さは溝底面より22cm、検出面より42cmを測る。

土坑内から径10~25cmの礫が数十個検出され、礫間から陶器、磁器、土人形、瓦、木、竹が出土した。

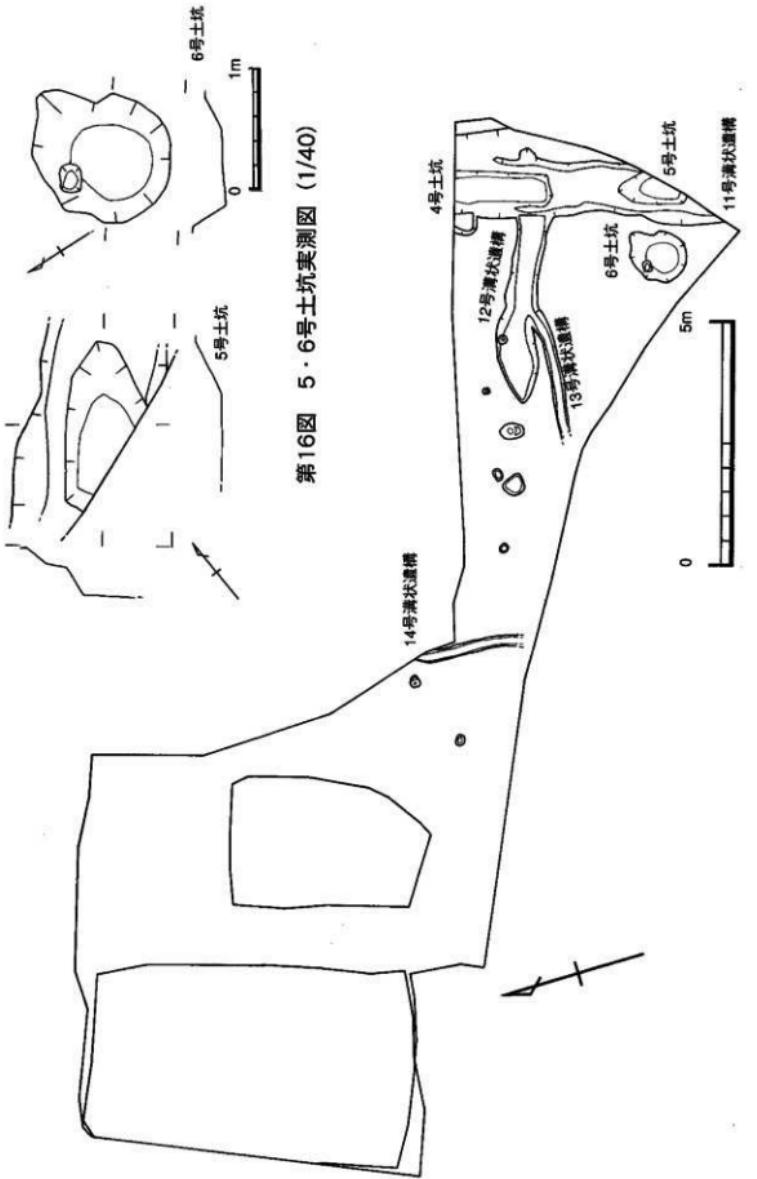
〔出土遺物〕 (第19図)

146は陶器の甕である。全体的に褐釉がかかっており、胴上半部には黄褐色の釉が、口縁部には明緑灰色の釉がかかる。欠損しているが胴上半部に耳を有する。147は棟瓦である。148は土人形の頭部である。

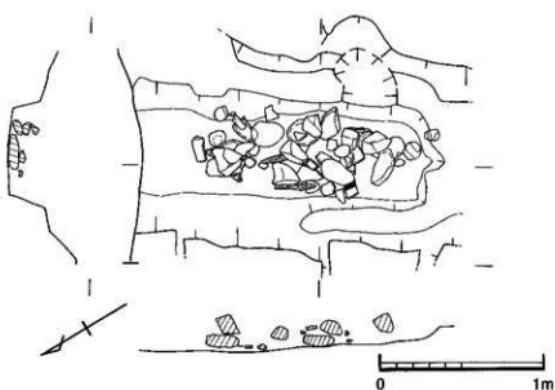
5号土坑 (第16図)

11号溝状遺構南側底面より検出された。東側から南側にかけては調査区外にかかる。平面形態は梢円形を呈するものと思われ、長径1.15m以上、短径0.65m以上、深さ22cmを測る。埋土中より土人形の頭部(149)が出土した。

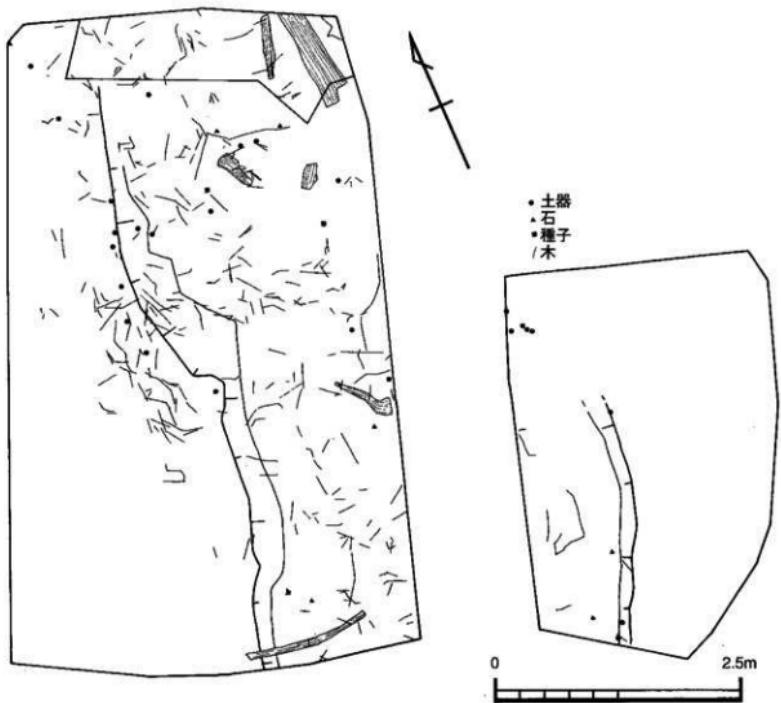
第15図 B区全体図 (1/100)



第16図 5・6号土坑実測図 (1/40)



第17図 4号土坑実測図 (1/30)



第18図 自然流路実測図 (1/50)

6号土坑 (第16図)

11号溝状遺構、5号土坑の西側に位置する。平面形態は円形を呈し、径1.1m、深さ25cmを測る。遺物は出土していない。

12号溝状遺構 (第15図)

調査区東側、11号溝状遺構の西側で長さ3.8mに渡って検出された。ほぼ東西方向に延びており、幅60~80cm、深さ7~12cmを測る。溝は西端で収束しており、溝底は東側に向かってなだらかに下降し、11号溝状遺構に合流する。断面形は逆台形を呈する。遺物は陶器、磁器、瓦が出土している。

〔出土遺物〕 (第19図)

150は肥前産染付磁器碗で、外面に梅文、見込に記号化した銘を描く。墨付は釉はぎである。

13号溝状遺構 (第15図)

調査区東側、12号溝状遺構の南側に位置する。東西方向に延び、幅30cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、溝底は東側に向かってなだらかに下降し、12号溝状遺構に合流する。遺物は出土していない。

14号溝状遺構 (第15図)

調査区中央に位置する。南北方向に延び、幅25cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

自然流路 (第18図)

B区西側、近世遺構検出面下層より検出された。遺構の検出は灰白色粘土層でおこない、流路の規模は幅4.3m、深さ約70cmを測る。流路西岸立ち上がりから、調査区西端に向けて、なだらかに高くなることから、流路の幅、深さは拡大する可能性もある。

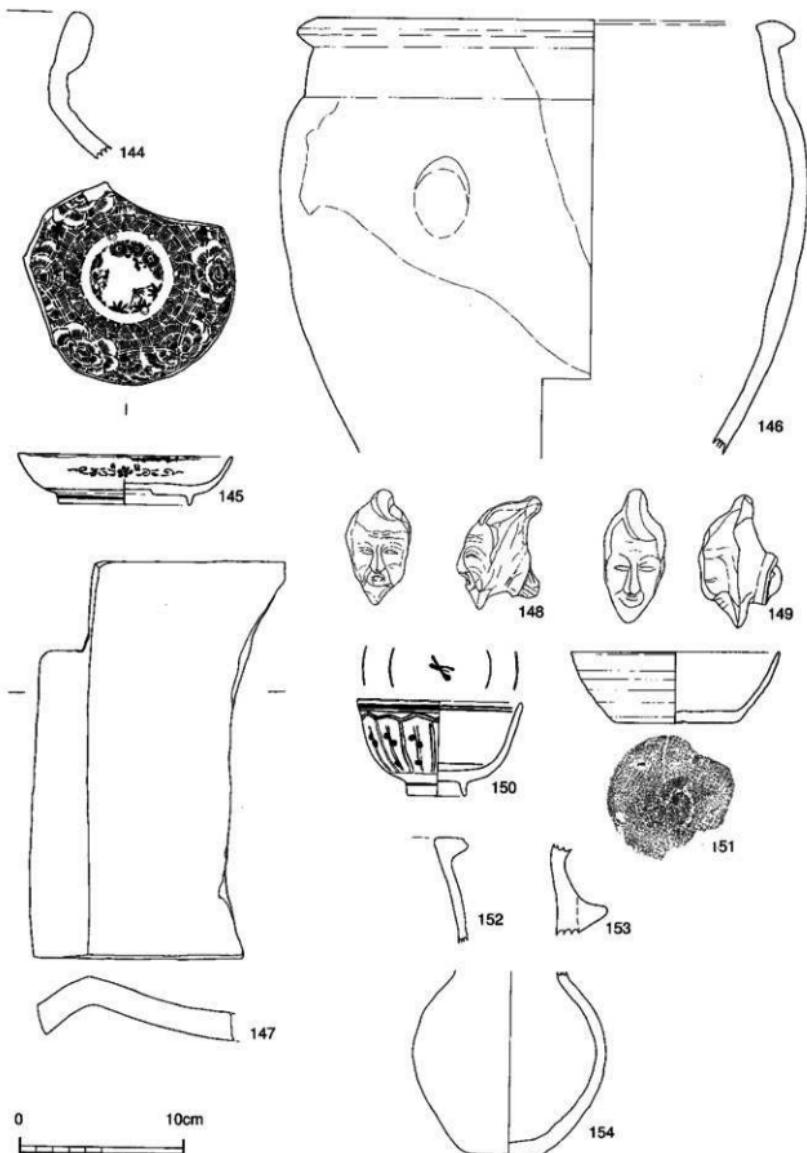
調査区南壁で確認した土層断面は I 層 - 明褐色土(表土)、II 层 - 黒色土、III 层 - 明灰褐色粘土(-部色)、IV 层 - 黑褐色土、V 层 - 明褐色砂質土(灰白色粘土層)、VI - I 层 - 灰白色粘土層(明褐色砂質土層)、VI - II 层 - 灰白色粘土層、VII 层 - 灰色砂層となる。III 层が近世遺構検出面で、流路の埋土は IV ~ VI - I 层である。V ~ VI - I 层は砂質土と粘土が、マーブル状に入り交じり、互層となる。

遺物はV層より、土師器、弥生土器片20数点、桃核が出土している。また、IV層とV層との境から、ほぼ同一レベルで多量の自然木、植物遺体が検出された。

〔出土遺物〕 (第19図)

151は土師器の壺である。底部はヘラ切りで、体部は内輪気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。推定口径12.8cm、底径7.3cm、器高4.4cmを測る。

152~154は弥生土器である。152は壺の口縁部である。L字口縁を呈する。153も壺で断面三角形の高く突出する突帯を付す。154は壺である。平底を呈し、胴中位が丸く張る。



第19図 B区出土遺物 (1/3)

第IV章 C区の調査

第1節 調査の概要

B区の道路を隔てた西側に位置し、調査以前には家屋が建っていた。調査はトレーナーをL字形に設定して行った。調査の結果、現地表より僅か30cm程で地山の灰色砂層にあたり、また、部分的に攪乱しており、遺構の残存状況はよくなかった。遺物は土師器、陶器、磁器の小片が僅かに出土したのみである。調査面積は40m²を測る。

第2節 遺構と遺物

7号土坑 (第20図)

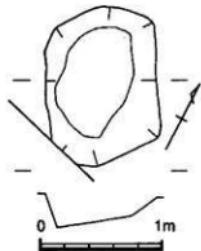
長径1.3m、短径0.9m、深さ30cmの梢円形を呈する。遺物は出土していない。

15号溝状遺構 (第22図)

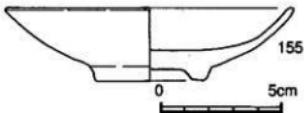
南北方向に延び、幅30cm、深さ10cmを測る。溝の断面形は浅い皿状を呈し、溝底はほぼ平坦である。遺物は磁器の小片が出土したのみである。

第3節 試掘調査の遺物 (第21図)

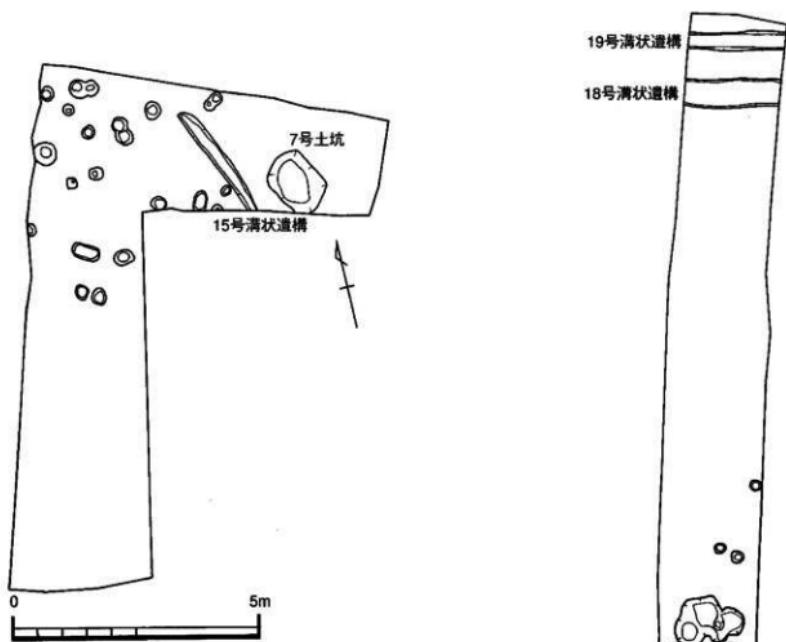
155は陶器の皿である。完形品で、黄灰色の釉薬がかかること。見込は蛇の目釉はぎ、胴下部から高台内外面は露胎となる。口径11.9cm、底径4.5cm、器高3.0cmを測る。



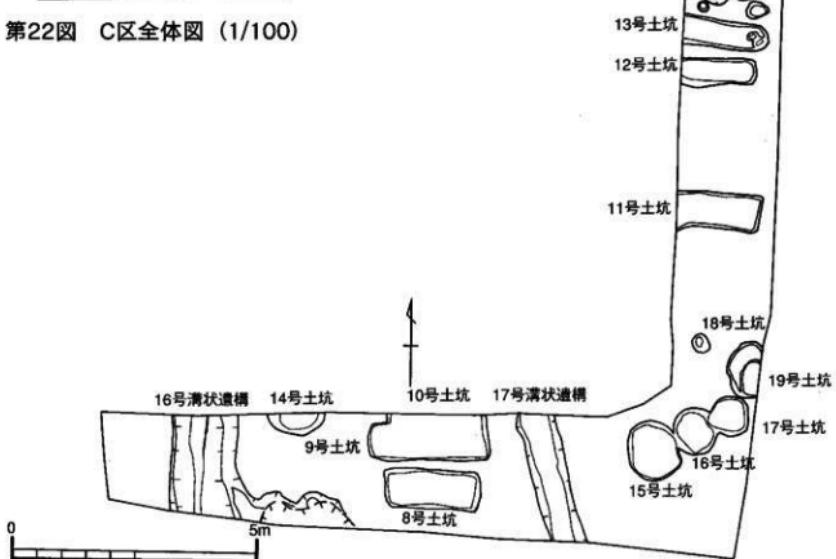
第20図 7号土坑実測図 (1/40)



第21図 C区出土遺物 (1/2)



第22図 C区全体図 (1/100)



第23図 D区全体図 (1/100)

第V章 D区の調査

第1節 調査の概要

C区の西側、家屋を挟んだ畠地に位置する。周辺の平坦部では一番高く、標高は6mを測る。調査はトレーナーをL字形に設定して行い、その結果、現地表下30cm程で地山の黄色砂層にあたり、この面で遺構を検出した。調査区内は一部攪乱していたが、遺構の残存状況は良好で、溝状遺構4条、長方形土坑6基、円形土坑6基が検出された。遺構に伴う遺物は少なく、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、土錐等が出土した。調査面積は75m²を測る。

第2節 遺構と遺物

8号土坑 (第24図)

9号土坑の南側に位置し、平面形態は長方形を呈する。主軸は東西方向で、規模は長軸1.95m、短軸0.8m、深さ15cmを測る。遺物は土師器の小片が数点出土している。

9号土坑 (第24図)

8号土坑の北側に隣接しており、平面形態は長方形を呈する。主軸は東西方向で、規模は長軸2.45m、短軸0.8m、深さ15cmを測る。北側で10号土坑と切り合っており、北壁は一部が残存するのみであった。遺物は出土していない。

10号土坑 (第24図)

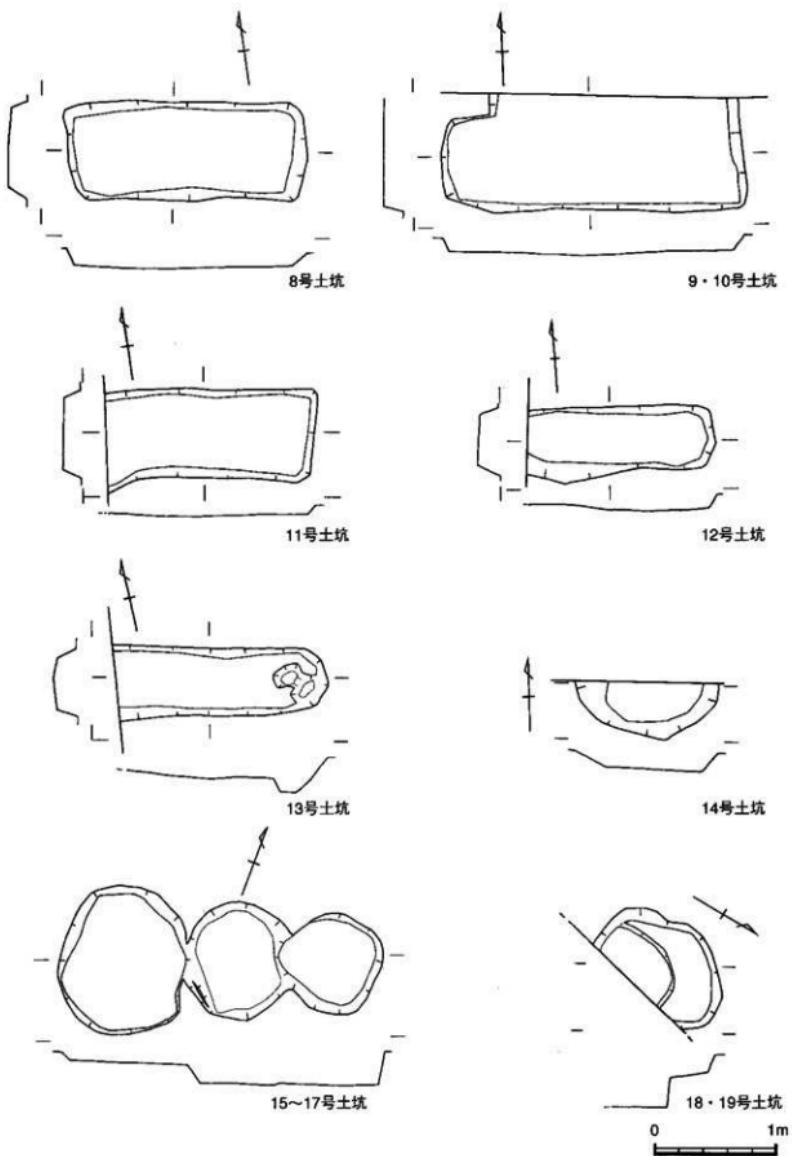
9号土坑と切り合っており、西壁及び東壁のごく一部のみ検出された。主軸は東西方向で、規模は長軸2.05m、短軸0.2m以上、深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

11号土坑 (第24図)

12号土坑の南側に位置し、西側は調査区外にかかる。平面形態は長方形を呈するものと思われ、主軸は東西方向である。規模は長軸1.7m以上、短軸0.75m、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。

12号土坑 (第24図)

11号土坑の北側に位置し、西側は調査区外にかかる。平面形態は長方形を呈するものと思われ、主軸は東西方向である。規模は長軸1.55m以上、短軸0.6m、深さ18cmを測る。遺物は出土していない。



第24図 8～19号土坑実測図 (1/40)

13号土坑 (第24図)

12号土坑の北側に隣接しており、西側は調査区外にかかる。平面形態は隅丸長方形若しくは長梢円形を呈するものと思われる。規模は長軸1.7m以上、短軸0.6m、深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

14号土坑 (第24図)

調査区西側に位置し、北側は調査区外にかかる。平面形態は円形を呈すると思われ、規模は径1.2m、深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

15号土坑 (第24図)

調査区南東側に位置し、平面形態は円形を呈する。規模は長径1.2m、短径1.05m、深さ12cmを測る。土坑内には粘土が充填してあった。遺物は出土していない。

16号土坑 (第24図)

15号土坑の東側に位置し、平面形態は円形を呈する。規模は長径0.95m、深さ30cmを測る。土坑内から軒平瓦、土錐、陶磁器類が出土した。

〔出土遺物〕 (第25図)

156は陶器の土瓶蓋である。外面は黒釉を施し、内面は露胎となる。157は土錐である。長方形の短辺側に丸みを持った平面形を呈し、縦断面は半月形である。表面中央が幅8mm程度で浅く溝状に窪み、四箇所に円形の穿孔を施す。右上部に「政」の字が彫り込まれている。長さ7.8cm、重さ104gを測る。158は均等唐草文軒平瓦である。

17号土坑 (第24図)

16号土坑の東側に位置し、平面形態は円形を呈する。規模は長径0.9m、短径0.8m、深さ28cmを測る。遺物は出土していない。

18号土坑 (第24図)

17号土坑の北東側に位置し、東側は調査区外にかかる。平面形態は円形を呈し、規模は長径0.8m以上、短径0.7m以上、深さ20cmを測る。遺物は土師器片が数点出土している。

19号土坑 (第24図)

18号土坑と重複して切り合っており、東側半分は調査区外にかかる。平面形態は円形を呈し、規模は長径0.55m以上、短径0.35m以上、深さ47cmを測る。遺物は出土していない。

16号溝状遺構 (第23図)

調査区西側に位置し、南北方向に延びる。規模は幅100cm、深さ65cmを測る。溝断面は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。

遺物は磁器の碗、花生、皿、陶器の壺、土師質土器の焙烙が出土している。

[出土遺物] (第25図)

159、160は肥前産染付磁器碗で、ともに「くらわんか手」と呼ばれる粗製の碗である。159は外面に梅樹文を描いている。見込は蛇の目釉はぎで砂目が付着する。豊付は釉はぎで、砂目が付着している。160は外面に丸文を描き、見込は蛇の目釉はぎで、砂目が付着する。豊付は釉はぎで、砂目が付着している。161は花生である。口縁部は大きく開き、端部は内側につまんでいる。肩部にボタン状の突起を2個有する。

162は焙烙である。土師質で、口縁部に穿孔が施してある。

17号溝状遺構 (第23図)

調査区南東に位置し、南北方向に延びる。規模は幅75cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色土で、溝断面はU字形を呈する。溝底は南側に向かって緩やかに下降している。

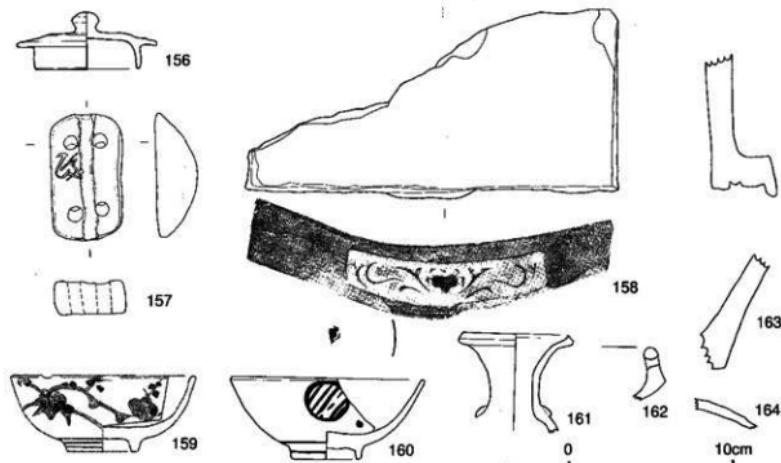
埋土中から弥生土器の壺(163)、土師器、磁器が出土している。

18号溝状遺構 (第23図)

調査区北側に位置し、東西方向に延びる。規模は幅60cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

19号溝状遺構 (第23図)

18号溝状遺構の北側に位置し、東西方向に延びる。規模は幅40cm、深さ20cmを測る。断面形は逆台形を呈し、溝底は平坦である。遺物は土師器、須恵器壺蓋(164)、陶器が出土した。



第25図 D区出土遺物 (1/3)

陶器・磁器觀察表

法單（）内数値は復元値

番号	遺構名	種類 器種	法量(cm)			装飾			底面・内底	色調		産地	備考			
			口径	底径	高さ	文様				外面	内面					
						繪付 磁葉	外 押印文	内 足込								
5	1号配石	陶器 瓶								にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	常滑				
11	1号土坑	陶器 瓶				三彩釉				灰白 暗褐色 綠灰	灰白 暗赤灰		買入			
12	1号土坑	陶器 瓶								明赤褐色	明赤褐色	堺?				
13	1号土坑	陶器 瓶								明赤褐色	明赤褐色					
14	1号土坑	陶器 瓶	(12.5)	3.7	5.4	黄灰色釉				にぶい黄色	にぶい黄色	買入 繪付釉はぎ				
15	1号土坑	磁器 瓶	(9.5)	4.4	4.0	青磁胎				潔胎	明綠灰色	明綠灰色	三本脚			
17	1号溝状遺構	磁器 瓶	(12.0)	4.4	6.4	染付 青磁胎		四方摩文	五弁花文	明綠灰色	白色	肥前 疊付釉はぎ				
23	3号溝状遺構	陶器 瓶								にぶい黄褐色	暗褐色	買入?				
24	3号溝状遺構	陶器 瓶								にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	系切底				
33	4号溝状遺構	陶器 瓶	(8.9)	4.5	3.7	反黄白色釉				潔胎	灰黃白色	灰黃白色	買入			
34	5号溝状遺構	磁器 瓶	(24.0)	(14.2)	3.5	染付 透明胎	唐草文	唐草文		潔胎	灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ			
35	5号溝状遺構	磁器 瓶	(14.0)	8.3	3.6	染付 透明胎	唐草文	菊唐草文		潔胎 蛇の目胎はぎ	灰白色	灰白色	肥前 口跡落物花形 疊付釉はぎ			
36	5号溝状遺構	磁器 瓶	(13.6)			染付 透明胎 白土	草文	二重巻口文		潔胎 蛇の目胎はぎ	灰白色 灰色 黃褐色	灰白色 灰色 黃褐色	肥前 玉筋口縁			
37	5号溝状遺構	磁器 瓶	(12.9)	4.9	5.8	染付 透明胎	草文			潔胎 蛇の目胎はぎ	灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ 砂目			
38	5号溝状遺構	磁器 瓶	(10.9)	4.1	4.9	染付 透明胎	梅瓣文			潔胎 蛇の目胎はぎ	灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ 砂目			
39	5号溝状遺構	磁器 瓶	10.3	3.7	5.5	染付 透明胎	蜻唐草文 花卉	四方摩文	松竹梅文	潔胎	灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ			
40	5号溝状遺構	磁器 瓶	(9.6)	3.7	5.2	染付 透明胎	高麗文				灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ 砂目			
41	5号溝状遺構	磁器 瓶				染付 透明胎	二重幅口文			潔胎	灰白色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ			
42	5号溝状遺構	陶器 瓶	(11.5)	(5.1)	8.2	黄灰色釉					浅黄灰色	浅黄灰色	肥前 疊付釉はぎ 砂目			
43	5号溝状遺構	陶器 瓶		4.3		黄灰色釉					オリーブ黄色	オリーブ黄色	肥前 疊付釉はぎ			
45	7号溝状遺構	陶器 瓶									赤灰色	赤灰色	堺			
46	7号溝状遺構	土解 瓷器									にぶい兩色	にぶい橙色	スス付青			
51	8号溝状遺構	磁器 瓶	9.2	2.4	5.0	染付 透明胎	蘿東 文	蘿			白色	白色	肥前 ほぼ完形			
134	A区包含層	陶器 瓶	10.0	4.2	6.0	青磁色釉				潔胎	青綠色 灰黃色	灰黃色	肥前 買入			
135	10号溝状遺構	磁器 瓶	13.3	5.2	3.0	染付 灰白色胎	草花文	五弁花文			灰白色	灰白色	肥前 コンニャク印模			
143	A区試掘	磁器 瓶	(11.0)	5.1	6.3	染付 青磁胎		四方摩文	五弁花文	獨福館	明綠灰色	灰白色	肥前 疊付釉はぎ			
144	11号溝状遺構	陶器 瓶									黒褐色	灰色	燒き締め			
145	11号溝状遺構	磁器 瓶	(13.2)	8.1	3.0	染付 透明胎	草花文	牡丹文	松竹梅文	蛇の目凹腹	灰白色	乳白色	口跡落物花形			
146	4号土坑	陶器 瓶	(26.8)			褐色 明綠灰色胎 灰褐色胎					暗赤褐色 黃褐色 明青灰色	暗赤褐色 黃褐色 明青灰色	買入 耳有り			
150	12号溝状遺構	磁器 瓶	10.1	3.5	5.8	染付 透明胎	梅文		記号有	潔胎	白色	白色	肥前 疊付釉はぎ			
155	C区試掘	陶器 瓶	11.9	4.5	3.0	黄灰色胎				潔胎	オリーブ色	反オリーブ色	鉢の日輪はぎ 買入 完形			

番号	造構名	種類 器種	法量(cm)			表			底面・内底	色調		産地	備考		
			口径	底径	器高	文様				外 面	内 面				
						縦付 輪形	外 面	内 面	見込						
156	16号土坑	陶器上皿	(6.3)	1.6	3.5	温附				輪形	黒褐色 灰赤色	にぶい橙色			
159	16号溝状造構	磁器 瓢	11.1	4.2	4.6	縦付 透明釉	梅樹文			圓錐	灰白色	灰白色	肥前	縦付輪形は 豊付輪形は 砂目	
160	16号溝状造構	磁器 瓢	(11.8)	4.0	5.0	縦付 透明釉	丸文		五弁花文	圓錐	灰白色	灰白色		豊付輪形は 砂目	
161	16号溝状造構	磁器 瓢	生	7.0		透明釉					灰白色	灰白色			
162	16号溝状造構	土師 茶湯									にぶい橙色	にぶい橙色		穿孔 スヌ付青	

弥生土器、土師器、須恵器観察表

法量() 内数値は復元値

番号	造構名	種類 器種	法量(cm)			表面調整			底面	色調		胎土	備考
			口径	底径	器高	外 面	内 面	底面		外 面	内 面		
6	1号配石	土師器 环				回転ナフ	回転ナフ	糸切り	灰オリーブ色	灰オリーブ色	粗砂粒を少量含む		
7	1号配石	土師器 小皿	(7.2)	(6.0)	1.7	回転ナフ	回転ナフ	糸切り	橙色	にぶい橙色	粗砂粒、透明 の粒を少量含む		
8	1号配石	須恵器 鉢				回転ナフ	回転ナフ		灰オリーブ黄色	灰オリーブ色	粗砂粒を少量含む		
9	1号配石	弥生土器 甕				ハケ後ナフ	ナフ		橙色	浅黄橙色	3mm以下の砂粒 をやや多く含む	突堤	
10	3号配石	須恵器 鉢				回転ナフ	回転ナフ		黃灰色 黒褐色	黃灰色	砂礫を少量、粗 砂粒を多量に含む		
16	3号土坑	土師器 甕				ナフ	ナフ		にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂礫、砂粒を 多量に含む		
19	2号溝状造構	須恵器 片口鉢	28.5	10.7	11.3	回転ナフ	ナフ 回転ナフ	糸切り	灰色 黒褐色	灰色	粗砂粒を少量含む	完形	
20	2号溝状造構	須恵器 鉢				回転ナフ	ナフ 回転ナフ		灰黄色	灰黄色	粗砂粒を少量含む		
21	2号溝状造構	須恵器 鉢				回転ナフ	回転ナフ		灰オリーブ色	灰色	粗砂粒を少量含む		
22	2号溝状造構	弥生土器 甕				ナフ	ハケ		橙色	にぶい橙色	砂粒を含む	突堤	
25	3号溝状造構	土師器 环				回転ナフ	回転ナフ		にぶい褐色	にぶい褐色	粗砂粒を少量含む		
26	3号溝状造構	土師器 小皿			1.6	回転ナフ	回転ナフ	糸切り	橙色	橙色	粗砂粒を少量含む		
27	3号溝状造構	土師器 小皿			1.2	回転ナフ	回転ナフ	糸切り	橙色	橙色	粗砂粒を少量含む		
28	3号溝状造構	須恵器 鉢				回転ナフ	回転ナフ		黑灰色	青灰色	砂粒、透明 の粒を含む		
30	3号溝状造構	弥生土器 甕				ハケ	ハケ後ナフ		褐反色	にぶい褐色	砂粒を含む		
31	3号溝状造構	弥生土器 甕				ナフ オサエ	ナフ		にぶい褐色	明黄褐色	砂粒を含む		
32	3号溝状造構	弥生土器 甕				風化の為、 不明	風化の為、 不明		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒、金雲母 を多量に含む	突堤	
47	8号溝状造構	土師器 甕			6.9	ナフ	ナフ		橙色	橙色	砂粒、砂粒を 多量に含む	木裏底	
48	8号溝状造構	土師器 甕				ナフ	ナフ		灰褐色 黑色	にぶい黄褐色	砂粒、砂粒を 多量に含む	木裏底	
49	8号溝状造構	弥生土器 甕				ナフ 波状文	ヨコナフ		橙色	にぶい橙色	砂粒を少量含む		

番号	遺傳名	種類・個體	法量(cm)			表面調整		色調		胎上	備考
			口径	底径	耐高	外面	内面	外面	内面		
50	8号溝状造構	新生土器 高环				ナード	ミガキ	橙色	橙色	砂粒を多量に含む	
52	10号溝状造構	新生土器 艶	28.9	4.7	26.8	ハケ後ナードココナード	ハケ後ナードココナード	灰黒褐色 にぶい褐色	淡黄褐色 にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	実帶
53	10号溝状造構	新生土器 艶		5.9	26.6	ハケ後ナード	ハケ後ナード	にぶい褐色	橙色 にぶい褐色	砂砾、砂粒を含む	
54	10号溝状造構	新生土器 艶				風化の為、不明	風化の為、不明	にぶい褐色	にぶい褐色	砂粒を多量に含む	
55	10号溝状造構	新生土器 艶		7.1	29.8	ナードココナード	ナードココナード	にぶい褐色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
56	10号溝状造構	新生土器 艶	22.5	5.8	26.7	タタキハケ	ナード	にぶい褐色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
57	10号溝状造構	新生土器 艶		4.4	20.0	ナード	ハケ後ナード	橙色	にぶい黄褐色	砂粒を多量に含む	
58	10号溝状造構	新生土器 艶	26.5			ハケココナード	ハケ後ナードココナード	にぶい褐色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
59	10号溝状造構	新生土器 艶				ハケココナード	ハケ後ナードココナード	にぶい褐色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
60	10号溝状造構	新生土器 艶	20.8			ハケ後ナードココナード	ハケ後ナードココナード	明褐色 にぶい褐色	橙色	砂砾、砂粒を含む	
61	10号溝状造構	新生土器 艶				風化の為、不明	風化の為、不明	橙色 褐灰色	橙色	砂粒を多量に含む	
62	10号溝状造構	新生土器 艶	24.9			ハケ	ハケ	橙色 浅黄褐色	浅黄褐色	砂粒、透明の粒を多量に含む	則日実帶
63	10号溝状造構	新生土器 艶	17.1	6.5	22.5	風化の為、不明	ナード	橙色	橙色	砂砾を多量に含む	ほぼ完形
64	10号溝状造構	新生土器 艶			13.9	ハケ後ナード	ハケ	橙色	にぶい褐色 橙色	砂砾、砂粒を多量に含む	
65	10号溝状造構	新生土器 艶		4.6		ハケ	ハケ	にぶい褐色 黒色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
66	10号溝状造構	新生土器 艶		6.6		ナード	ナード	橙色	橙色	砂粒を多量に含む	
67	10号溝状造構	新生土器 艶		6.6		ハケ後ナード	ハケ後ナード	にぶい褐色 褐色	明褐色 褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
68	10号溝状造構	新生土器 艶		10.0		ハケ後ナード	ナード	褐褐色	褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	底部縁則
69	10号溝状造構	新生土器 艶		6.0		風化の為、不明	風化の為、不明	にぶい褐色 褐灰色	にぶい褐色	砂砾、砂粒を含む	
70	10号溝状造構	新生土器 艶		7.0		風化の為、不明	風化の為、不明	橙色	橙色 浅黄褐色	砂粒を多量に、透明の粒を少量含む	
71	10号溝状造構	新生土器 艶		6.5		ハケ後ナード	ハケ後ナード	にぶい褐色	にぶい赤褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
72	10号溝状造構	新生土器 艶		6.9		風化の為、不明	風化の為、不明	橙色	明赤褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
73	10号溝状造構	新生土器 艶	(5.0)			ハケ後ナード	ナード	浅黄褐色	浅黄褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
74	10号溝状造構	新生土器 艶		4.4		風化の為、不明	風化の為、不明	橙色	褐色	砂粒を多量に含む	
75	10号溝状造構	新生土器 艶		4.6		ナード	ハケ	にぶい褐色	にぶい褐色 褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	
76	10号溝状造構	新生土器 艶				風化の為、不明	風化の為、不明	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂砾、砂粒を多量に含む	則日実帶
77	10号溝状造構	新生土器 艶				ハケ後ナードココナード	ハケ後ナード	橙色	橙色 黒色	砂砾、砂粒を多量に含む	則日実帶
78	10号溝状造構	新生土器 艶				風化の為、不明	風化の為、不明	橙色	にぶい黄褐色	砂粒、透明の粒を多量に含む	実帶
79	10号溝状造構	新生土器 艶	19.0	8.2	56.2	ハケ後ナードミガキ	ハケ後ナード	橙色 灰黑色	にぶい褐色 褐色	砂粒を含む	
80	10号溝状造構	新生土器 艶	12.7			ナード波状文	風化の為、不明	橙色	橙色	砂粒、透明の粒を多量に含む	
81	10号溝状造構	新生土器 艶				風化の為、不明	風化の為、不明	橙色	橙色	砂粒、透明の粒を含む	

番号	遺構名	探査・深幅	法量(cm)			表面調整		色調		胎土	備考
			口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
82	10号溝状遺構	脊生土器 壺	13.3			ハケ ヨコナデ	ナデ	褐色 にぶい黄橙色	灰黄色	砂粒を多量に含む	
83	10号溝状遺構	脊生土器 壺	10.5			ナデ	ナデ	橙色	橙色	砂礫、砂粒を 多量に含む	
84	10号溝状遺構	脊生土器 壺	12.9	2.5	20.7	ハケ後ナデ	ハケ オサエ	褐色 赤橙色	橙色 にぶい橙色	砂粒、透明の 粒を多量に含む	ほぼ完形
85	10号溝状遺構	脊生土器 壺		5.9	17.2	ナデ	ナデ オサエ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	砂粒を含む	繊細
86	10号溝状遺構	脊生土器 壺	16.0	4.0	18.4	ナデ	ミガキ オサエ	にぶい橙色 褐色	にぶい橙色	砂粒をやや多く含む	
87	10号溝状遺構	脊生土器 壺	12.9			風化の為、不明	ハケ オサエ	にぶい橙色	灰白色 にぶい橙色	砂粒を多量に含む	
88	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ハケ後ナデ	ナデ オサエ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	砂粒を多量に含む	
89	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ミガキ	ハケ後ナデ オサエ	浅黄橙色	褐色	砂粒を少量含む	
90	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ナデ	ナデ オサエ	にぶい橙色	淡橙色、橙色	砂粒、透明の 粒を含む	
91	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ハケ	ハケ オサエ	褐色	灰白色 にぶい黄橙色	砂粒を多量に含む	
92	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ハケ後ナデ	ナデ オサエ	にぶい橙色	灰色	砂粒を多量に含む	
93	10号溝状遺構	脊生土器 壺				風化の為、不明	ナデ オサエ	褐色	灰オリーブ色 灰色	砂粒を多量に含む	
94	10号溝状遺構	脊生土器 壺		7.6		ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒を多量に含む	
95	10号溝状遺構	脊生土器 壺		4.6		ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒を含む	
96	10号溝状遺構	脊生土器 壺		6.5		ハケ後ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒を含む	
97	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色 黒褐色	砂粒を含む	
98	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ナデ 波状文	ナデ	褐色	褐色	砂粒、透明の 粒を含む	
99	10号溝状遺構	脊生土器 壺				ハケ後ナデ キサミ	ミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒、透明の粒を 多量に含む	
100	10号溝状遺構	脊生土器 高坏	39.0			ミガキ	ナデ	褐色 褐色にぶい橙色	褐色 褐色にぶい橙色	砂粒を少量含む	
101	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	砂板を多量に含む	
102	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ナデ	にぶい橙色 淡黄橙色	にぶい橙色	砂礫、砂粒を 多量に含む	
103	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				風化の為、不明	ミガキ	褐色 明褐色	淡橙色 明褐色	砂粒、透明の 粒を含む	
104	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				風化の為、不明	風化の為、不明	褐色 淡黄橙色 黒褐色	褐色 淡黄橙色 黒褐色	砂粒を多量に含む	
105	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2mm以下の砂 粒を含む	
106	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				風化の為、不明	風化の為、不明	褐色 にぶい橙色	明赤褐色 にぶい橙色	砂礫、砂粒を 多量に含む	
107	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	砂粒、透明の粒 を少額含む	
108	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	黃橙色	砂粒、透明の 粒を含む	穿孔
109	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ハケ後ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色 橙色	砂粒を含む	穿孔
110	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	砂粒を含む	穿孔
111	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				風化の為、不明	風化の為、不明	浅黄橙色 黃褐色	浅黄橙色	砂粒を多量に含む	
112	10号溝状遺構	脊生土器 高坏				ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	2mm以下の砂 粒を含む	

番号	遺構名	種類・耐候	法 品(cm)			器 画 溝 痕			色 調		胎 土	備 考
			口径	底径	器高	外 面	内 面	底面	外 面	内 面		
113	10号溝状遺構	弥生土器 鉢				ナデ	ハケ後ナデ		にぶい橙色 褐灰色	にぶい橙色 褐灰色	砂礫、砂粒を 多量に含む	
114	10号溝状遺構	弥生土器 鉢				ハケ後ナデ ヨコナデ	ハケ後ナデ ヨコナデ		淡黄褐色 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂礫、砂粒を 少量に含む	
115	10号溝状遺構	弥生土器 鉢				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ		にぶい褐色	にぶい褐色	砂礫及び褐色透 明の粒を含む	
116	10号溝状遺構	弥生土器 鉢				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ		にぶい黄褐色	にぶい橙色	砂粒を多量に含む	
117	10号溝状遺構	弥生土器 鉢	19.5			ナデ	ナデ		橙色	橙色	砂粒及び透明の 粒を含む	
118	10号溝状遺構	角生土器 鉢			11.3	ハケ ヨコナデ	ハケ ヨコナデ		にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒を多量に含む	
119	10号溝状遺構	角生土器 鉢			13.0	ミガキ ヨコナデ	ナデ		橙色	橙色	砂粒を含む	脚台
120	10号溝状遺構	弥生土器 鉢			6.8	風化の為、 不明	ナデ		にぶい橙色 褐灰色	にぶい橙色	砂礫、砂粒を 多量に含む	線刻
121	10号溝状遺構	弥生土器 鉢	9.8	6.3	10.4	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ		淡黄褐色	淡黄褐色 褐灰色	砂粒を含む	ほぼ完形
122	10号溝状遺構	弥生土器 ミニチュア鉢	8.3	2.2	5.3	ナデ	ナデ		橙色 黒褐色	灰白色 暗褐色	砂粒を含む	ほぼ完形
123	10号溝状遺構	弥生土器 ミニチュア鉢			5.0	オサエ	オサエ		褐灰色	橙色	砂粒を多量に含む	
124	10号溝状遺構	弥生土器 ミニチュア鉢	5.1		5.6	ナデ	ナデ		橙色 にぶい黄褐色	橙色 黄灰色	砂粒を多量に含む	完形
125	10号溝状遺構	弥生土器 ミニチュア鉢	5.4		3.6	ナデ	ナデ		灰白色 灰白色	灰白色 灰黄色	砂粒を多量に含む	ほぼ完形
129	A区包含層	須恵器 鉢				回転ナデ	回転ナデ	糸切り	灰黄色	黄灰色	砂粒を含む	
130	A区包含層	土師器 壺	12.7	5.8	4.1	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	淡黄褐色	橙色	砂粒を含む	ほぼ完形
131	A区包含層	土師器 壺	12.3	7.2	3.9	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂粒をごく 少量含む	ほぼ完形
132	A区包含層	土師器 小瓶	8.3	6.2	1.7	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂粒をごく 少量含む	ほぼ完形
133	A区包含層	土師器 小瓶	(7.5)	(5.7)	1.3	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	橙色	橙色	細砂粒を少量含む	
140	A区試掘	土師器 壺	(13.1)	(6.4)	3.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	橙色	橙色	細砂粒を少量含む	
141	A区試掘	土師器 小瓶	8.2	6.3	1.9	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	橙色	橙色	細砂粒を少量含む	ほぼ完形
142	A区試掘	土師器 小瓶	7.7	5.9	1.6	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	橙色	橙色	細砂粒を少量含む	
151	自然流路	土師器 壺	(12.8)	7.3	4.4	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	淡褐色 灰白色	淡褐色 灰白色	砂粒、黑色透明の 粒を多量に含む	
152	自然流路	弥生土器 壺				ナデ	ナデ		灰黄色	にぶい橙色	砂粒、黑色透明の 粒を多量に含む	
153	自然流路	弥生土器 壺			4.5	風化の為、 不明	風化の為、 不明		明褐色	明褐色	砂粒、透明、黑色 透明の粒を含む	
154	自然流路	弥生土器 壺				風化の為、 不明	風化の為、 不明		淡赤褐色	にぶい黄褐色	砂粒を含む	突堤
163	17号溝状遺構	弥生土器 壺				ナデ	ナデ		にぶい褐色	にぶい褐色	砂粒、黑色透明の 粒、金剛石を含む	
164	19号溝状遺構	須恵器 壺				回転ナデ	回転ナデ		灰色 灰白色	灰色	砂粒をごく少量含む	

第 VI 章 まとめ

東宮遺跡の調査では、弥生時代～近世の遺構や遺物が検出された。ここでは確認された成果の中から、各遺構の年代、性格等について簡単に整理し、まとめとしたい。

はじめに、A区より3基検出された配石遺構についてであるが、最も規模の大きな1号配石遺構は溝状の掘り込みをもち、礫を層状に厚く積み重ねており、暗渠的な機能を想起させる。しかし、他の配石遺構が掘り込みをもたないことから、もともとは1～3号配石遺構はひとつのもので他の用途をもっていた可能性も指摘できる。1号配石遺構から五輪塔の空風輪、火輪が出土し、調査区南西隅外側の竹林内に五輪塔残欠部が寄せてであることから、五輪塔再安置時の基礎施設の可能性もある。構築時期は、1号配石遺構下に重複する1号溝状遺構出土磁器から、18世紀中葉以降と考えられる。

次に溝状遺構についてであるが、A区より10条、B区より4条、C区より1条、D区より4条検出されている。これらのうち、最も時期の遅いものはA区より検出された10号溝状遺構である。10号溝状遺構からは弥生時代後期～終末期の土器が大量に出土した。なかには完形で出土したものも数点あり、土器を包含する層の厚さは45cmに及ぶ。出土した土器の器種構成、出土状況から、祭祀行為等の特殊な状況は窺えず、単に、溝への土器の投棄によるものと思われる。調査区内で、他に弥生時代に属する遺構は検出されなかったが、A区東側は基盤である砂層が、西側に隣接するB区に比べ、かなり浅い位置で検出されること、A区西側で検出された中世以降の遺物包含層が残存していないことから、本来は現状よりも高い砂丘地形で、その上に集落が立地していた可能性もある。いずれにせよ、付近に弥生集落の存在が想定される。

次いで、古墳時代の溝状遺構として、A区8号溝状遺構が挙げられる。溝埋土内より、木葉底の甕が出土している。当遺跡内における古墳時代遺物は極めて少ない。

中世に属する溝状遺構は、A区2号溝状遺構が挙げられる。2号溝状遺構からは溝底面より、東播系須恵器の片口鉢が完形で出土した。その形態より、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。また、遺構埋土及び、A区西側のみに拡がる中世～近世の包含層と見られる暗褐色土から、13～15世紀代の土師器壺、小皿、14世紀後半代の東播系須恵器鉢、15世紀前半代の石鍋等が出土している。また、試掘調査時に発見された和鏡は、錐形より12世紀末～13世紀前半に比定される。

その他の溝状遺構からは、陶器、磁器が出土しており、大半は近世以降の構築と思われる。出土遺物より、1、3号溝状遺構が18世紀中頃、4、5号溝状遺構が18世紀中頃～後半代に、7、16号溝状遺構が、18世紀後半～19世紀前半代、11、12号溝状遺構が幕末～明治時代以降の構築が考えられる。溝の用途としては排水、区画等を意図したものであろう。

余談であるが、調査中に多くの地元の方より、A区の北側に隣接する土地が、昔は庄屋宅であったという話を採集できた。今回の調査で検出した遺構、出土した遺物からは残念ながら、このことを裏付けることはできなかった。

土坑については、A区で3基、B区で3基、C区で1基、D区で12基検出されている。土坑は平面形は長方形、方形、円形、楕円形と様々であるが、長方形、円形を呈するものが大半を占める。これらのうち、ある程度、遺物が出土しているものは1、4、16号土坑の3基のみで、陶器の甕、擂鉢、碗、蓋、磁器の碗、香炉、瓦、土製品の錘、人形が出土している。また、やや特殊なものとして、埋土中から円碟が検出された1、4号土坑、溝状遺構内に掘り込まれた4、5号土坑が挙げられる。

大半の土坑が遺物を伴っておらず、時期、性格については明確にしがたいが、いくつかの遺物を伴う土坑の検出状況より、これらは廃棄行為に伴うゴミ穴の可能性が高い。時期については、18世紀後半以降と推測される。

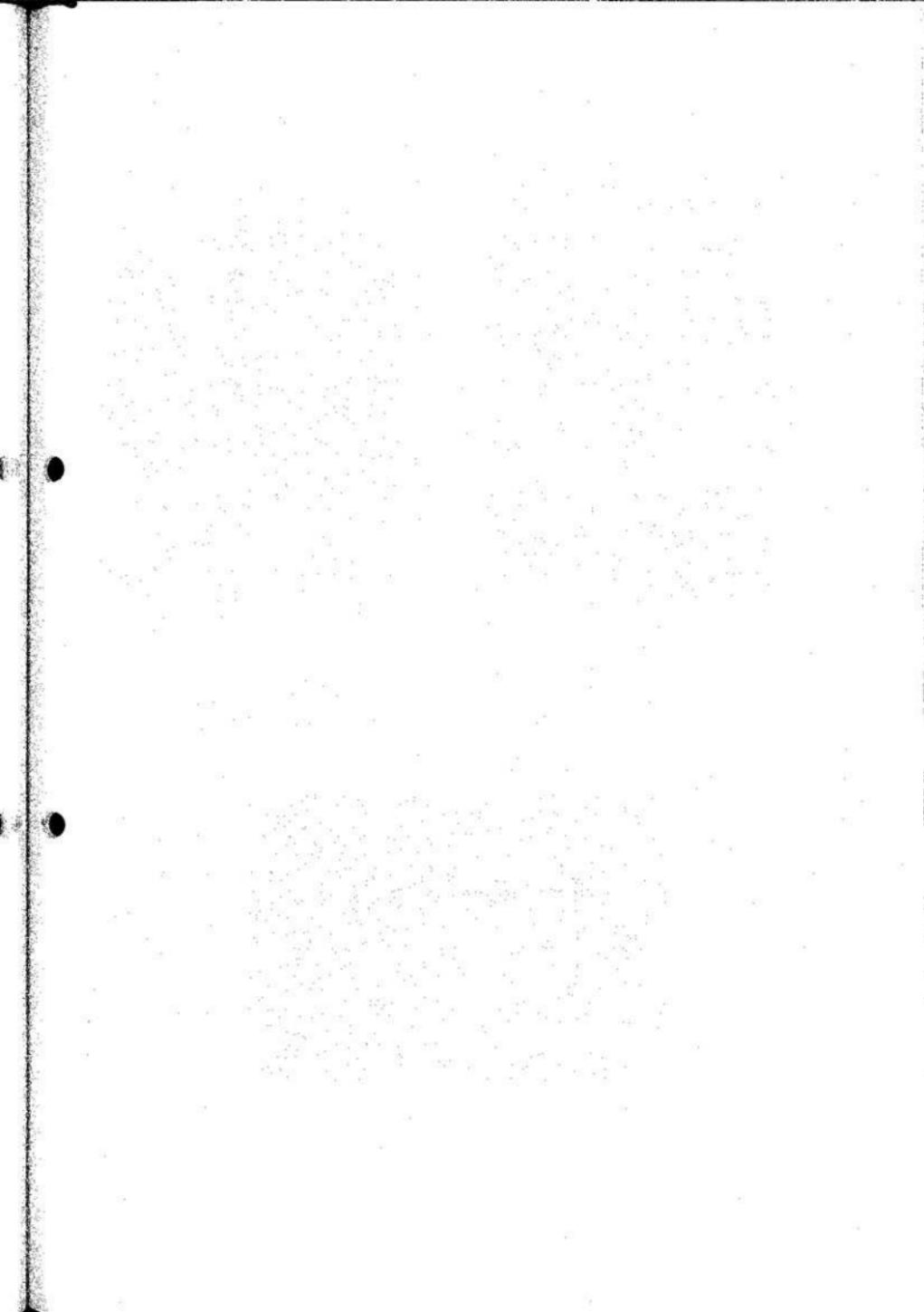
B区より検出された自然流路からは、大量の自然木、植物遺体に混じって、弥生後期～終末期、10世紀代の土師器壺が出土した。土層観察により、古代末～中世以降に流路は埋まっており、今回検出した形状は、埋没前に存在した最後の形態で、それ以前は規模も今より、ひとまわり大きく、また、沼地であった可能性もある。遺物は粘土と砂質土の互層より出土しており、また、出土数も少ないとから、流れ込んだものと思われる。

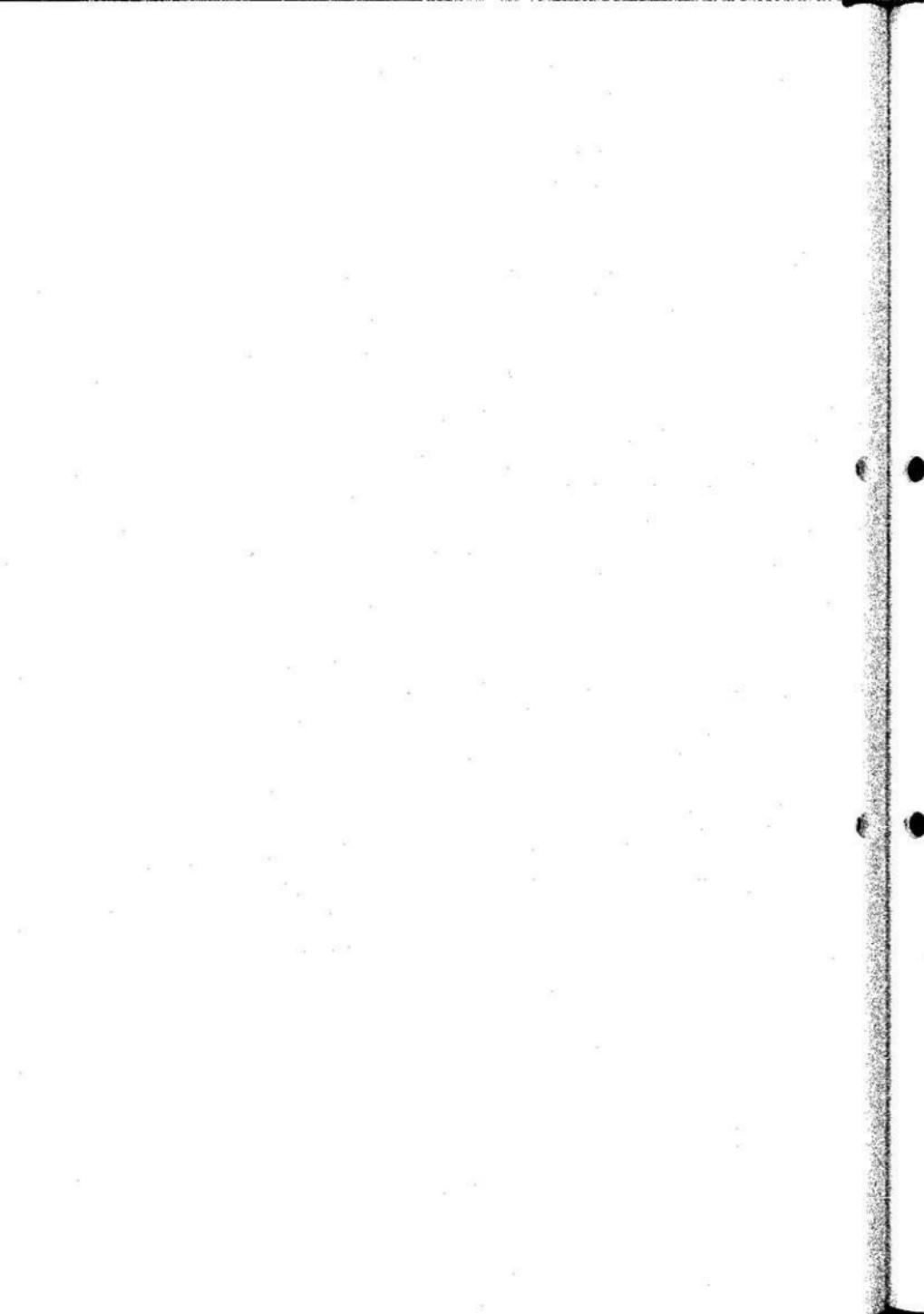
自然木、植物遺体は最下層の灰色砂層、遺物の出土した粘土と砂質土の互層からも検出されているが、流路の埋土である黒褐色土層と白色粘土を含む明褐色砂質土層の境付近より、樹木が倒れ込んだような状態で、大量に検出されている。最後の洪水の状況を示しているものと思われる。

流路埋没後は土層より、造成が行われたような痕跡が認められ、近世代は完全に陸地になっている。その後、締まりのない黒色土が堆積しており、その層の一部より、竹、藁が重なり合った状態で検出された。近代の灌漑、排水施設の一形態であろうか。自然（水）を克服しようとした人の歴史が窺える。

まもなく、郡司分地区に区画整理によって大規模な団地が誕生する。先祖代々、この地に住んでいる人々、新しくこの土地に住まいを設ける人々に、東宮遺跡の調査で、この地の歴史背景、文化財保護の重要性を伝えることが出来ただろうか。今回の調査報告を少しでも多くの方々に知ってもらい、関心をもってもらえば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査中、色々と便宜をはかつていただいた担当の██████████をはじめとする東宮土地区画整理組合の方々、多雨、猛暑、渓水と惡条件の重なるなか、調査に従事して下さった作業員の皆様に心から感謝申し上げます。







図版2 1号配石遺構五輪塔出土状況1



図版3 1号配石遺構五輪塔出土状況2



図版1 1号配石遺構（北から）



図版5 3号配石遺構（北から）



図版7 2号溝状遺構須恵器出土状況



図版4 2号配石遺構（北から）



図版6 1号土坑（南から）



図版9 4~7号溝状遺構（北東から）



図版11 8・9号溝状遺構（北東から）



図版8 1・3号溝状遺構（北東から）



図版10 5号溝状遺構（南から）